

Ernst Grosse (1) : His Family and His Tour to East Asia in the Capacity of Art Collector

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/974

エルンスト=グロッセ(稿)-1-: その家族及び東亞古美術調査収集行簡介

- I. はじめに(33- 46頁) II. E.グロッセの家族とその家系(47- 70頁)
附圖 «E.グロッセ家系略圖»(71- 2頁) ☆引用論著目録[本號部分](i- viii頁)
——以下は次號以降—— III. ステンダール・マクデブルク・フライブルク
附表 «E.グロッセ在“フライブルク市住民録”» IV. 東亞古美術調査収集行簡介
附 “藝術叢記”細目 V. おわりに VI. 引用論著目録[全]

持 井 康 孝

I. はじめに

エルンスト=グロッセ Ernst Carl Gustav GROSSE (*1862.- †1927.; 本稿では特別な場合を除きE.グロッセと簡稱)は, 1880年代から1920年代にかけての獨逸において哲學(心理學・文藝學・美學・藝術學を含む)・民族學・東亞美術史などの各分野に互って優れた先驅的研究を行なうとともに, ヴィルヘルム=フォン・ボーデ Wilhelm von BODE (*1845.- †1929.)やオットー=キューメル Otto KÜMMEL (*1874.- †1957.)などと共にプロイセン王立博物館東亞藝術館 Königliche Museen Ostasiatische Kunstsammlungの創設に深く參與した一研究者である。公表した論著の数は必ずしも多くはないが, その初期に發表した主要論著下記6點のうちの特に4.は, 諸民族の家族形態

1. Die Literatur-Wissenschaft: ihr Ziel und ihr Weg, 1887, Halle.
2. Herbert Spencer's Lehre von dem Unerkennbaren, 1890, Veit & Comp., Leipzig.
3. Die Anfänge der Kunst, 1894, J. C. B. Mohr, Freiburg i. Br..
4. Die Formen der Familie und die Formen der Wirthschaft, 1896, J. C. B. Mohr, Freiburg i. Br..
5. Kunstwissenschaftliche Studien, 1900, J. C. B. Mohr, Tübingen, Freiburg i. Br. & Leipzig.
6. Aufgabe und Einrichtung einer städtischen Kunstsammlung, 1902, J. C. B. Mohr(Paul Siebeck), Tübingen und Leipzig.

とその經濟・社會形態との間に見出される相間關係に着目して諸事例を分析・検討し, 人類社會の進化・發展が決して單一ではないことを明確に指摘した研究成果として高い評價を得て, その後の斯界の研究を大いに裨益した論文であり¹, 同様の視點を以て藝術の始源に就て考究した3.は, 極めて野心的な論考であった。又, このうちの4.は日語抄譯²のみのようであるが, 3.は英・佛・日語などに翻譯されて版を重ねることも多く, 20世紀前半において, 彼の仕事の成果は

¹ 例えば, シュミット・コッパース1970., 上265- 6, 347- 8, 361- 3, 406- 7頁, 下30- 5, 149- 150, 234- 6, 279- 280, 282, 347- 350頁など。

² 元來, 當書の日語譯に就ては福田徳三(*1874.- †1930.)がE.グロッセの許可を得ていたとのことである(河田1918., 316頁)。尙, 福田徳三に就ては井關1921.の紹介(81- 2頁)が肝要を得ているものの, 彼の東亞經濟史研究に内在する問題點に就ては, ヒンツェ1966.中の阿部謹也氏譯註(76)- (86)及び同氏‘あとがき’(同書85- 109頁)を要併照。又, 河田嗣郎(*1883.- †1942.)に就ては, 井關1921., 199- 200頁に簡介あり。

ドイツ語圏以外の読者にも博く識られていたと言えよう³。

E.グロッセの東亞古美術に對する研究とその資料収集活動の本格的開始は、1890年代⁴におけ

³ 筆者の知る限り、漢語學術論著中でE.グロッセの名を挙げたものは、“格羅斯(E.Gros[β?/ss?])”(陳1936., 319頁)の1例のみのものである。

⁴ E.グロッセの手稿本“藝術叢記”②(1896.- 1924.), 即ちElbs-May 1977.の所謂“Tagebuch”中の一冊から窺い得る兩者出會いの最古例は1897年春である(“藝術叢記”に就ては本稿44- 5頁脚註56を参照)。これは、林忠正が後年(同記録前後の日附から推測すると1902年9月頃か?)その往時を回顧してE.グロッセに語った言葉をE.グロッセが記録したもので(同書[138]頁), 其處には、ゴンクールの賣立ての頃にE.グロッセとマリー=マイヤーが林忠正から茶道用陶器を購入し云々, とあり, この“ゴンクールの賣立て”とは、1897年3月にパリで開催されたE.ゴンクールEdmond de GONCOURT (*1822.- †1896.)遺品の競賣會を指す。但、E.グロッセ發オットー=キュメル宛1896年5月14日附書翰(Veit 1996.所引; 筆者未見)には、その書翰執筆直前にE.グロッセがパリのピングBING, 林HAYASHI, ジロGILLOTの許を訪れ, [東亞古美術に對する]知見を大いに博めたことが記されており(Veit 1996., 22頁), これに據れば兩者の出會いは1896年5月以前に遡る。因に、19世紀末におけるE.グロッセと日本人との交流は林忠正に止まらぬ。例えば、1894年から1898年にかけて當時の帝國大學醫科大學助教授として獨逸(主に在フライブルク大學醫學部)に留學した大澤岳太郎(*1863.- †1920.; 醫博・理博)もそのうちのひとりで、彼が留學期間中にE.グロッセとマリー=マイヤーの應接を受けたことは、その歸國直後に認めた禮狀(大澤岳太郎夫妻Osawa und Frau發E.グロッセHerrn Professor Grosse, Titisee Schwarzwald, Baden, Germany.宛1898年9月18日[消印: 20日・東京]附葉書, フライブルク大學民族學研究室所藏)から確認し得る。このような例は、恐らく彼の場合に止まるものではなかったであろう。尙、大澤岳太郎本人の經歷に就ては、井關1922., p.27, 26頁に簡介があり、彼の養父・大澤謙二(*1852.; 醫博)に就ては同書, pp.4- 5, 4- 5頁に、養女(*1877.)夫君・櫻井恆次郎(醫博)に就ては同書pp.90- 1, 86頁に、長女(*1891.)夫君・乾政彦(法博)に就ては井關1921., 160- 1頁に、そして次女(*1894.)夫君・高橋信美(醫博)に就ては井關1926., pp.403- 4, 434- 5頁に各々その簡介がある。又、彼本人の歸國に就ては、明治三十一[1898]年九月五日附“官報”彙報・學事: 留學生發著に“文部省外國留學生大澤岳太郎ハ去月三十一日歸朝シ同時重初熊同高木貞治ハ出發セリ(文部省)”(39頁)とあり、その夫人に就ては、“妻ユリア、マイエル(明治五[1872.]年二月生獨逸人アウグストマイエル長女)”(前掲井關1922., 27頁), “Mrs. Julia Meyer (widow to the late Hakushi, a German lady)”(同書p.28)とある。彼女とマリー=マイヤーとの關係(同一家系を示唆する資料は筆者未見)及び大澤夫妻の結婚年共に未詳のため、一應1894- 1898年の“フライブルク市住民録AB[Adreßbuch]- Freiburg”を簡査したところ、“ = [Meyer] Aug[st]., Dr., prakt[ischer]. Arzt, Tahlstr. 4”(同f.1895., X.264頁, 同f.1896., X.246頁, 同f.1897., X.270頁), “ = [Meyer] Aug[st]., Dr., Arzt-Wwe., Tahlstr 4”(同f.1898., IX.281頁)の如き全科擔當開業醫の醫學博士アウグスト=マイヤー(†1897.)なる人物を見出した(尙、同市住民録には、前掲期間をその途中に挟む都合四半世紀に互り、このアウグストとその學位・職業・住所を同じくするHans MEYERなる人物も記載されており、兩者は同一家系所屬ではないかと想われるものの、その續柄に就ては不詳)。彼が大澤岳太郎の岳父に當るのか否かは他證を要することと言う迄もないが、念のため附記しておく。因に、大澤の使用した“萬國郵便聯合端書Union Postale / Universelle Carte Postale”は日本圓‘四錢’, その日/獨兩局における消印の日附は‘Tokio, 20, SEP, 98’ / ‘TITISEE, 31. 10, 98’である。又、當葉結句“Mit vielen Grüßen auch an Ihre Frau

る林忠正(*1853.11.7.- †1906.4.10.)⁵との出逢いをその直接的契機とするとみて大過あるまい⁶。林忠正は、当時パリに店を構えて主に東亞古美術を歐米一圓において商っていた人物である⁷。E.グロッセは美に對する鋭い感性を具有していたうえに、この林忠正によるその在歐優品を教材とした懇切丁寧な解説・教授とを得て⁸、東亞古美術に對する鑑識眼およびその背景としての東亞諸文化全般に亙る理解とを急速に向上・深化させ得たものと想われる。

勿論、マリー=マイヤーMarie Louise MEYER (舊姓TOBERENTZ, *1833/4? - †1915.)⁹の存在も忘

Mutter verbleiben wir Ihre Getreue Osawa und Frau.”中の“Ihre Frau Mutter”とは、マリー=マイヤーを指す。⁵ 長谷川・武澤1996.

⁶ E.グロッセと東亞美術工藝品との出逢いは、15歳乃至はその少し後のマクデブルク市在住時代に遡り、某年聖誕節時の父への贈物として、群鶴をあしらった青銅柄の日本製ペーパーナイフを選んだという(“藝術叢記”②(1896.- 1924.), [89]頁)。又、東亞古美術に對する感動を伴う關心は、マリー=マイヤー蒐儲品を觀た時に始まるという(“藝術叢記”②(1896.- 1924.), [92]頁)。フライブルク時代のE.グロッセの住民登録地は、少くとも1889年12月1日迄は在エルプ プリンツェン街Erbprinzenstr. 10番地 (AB- Freiburg, f.1890., X.194頁)であり、その住民登録地を在モーツァルト街Mozartstr. 5番地のマリー=マイヤー邸に移したことを確認し得るのは、同市1894年用住民録においてである(X.135, XI. 210頁。當時の住民録は、通例その前年12月1日の登録状態に據り編纂。又、その前年に當る1893年用住民録[1892.12.1.附?]でのE.グロッセに關する記録は皆無)。如上の“マリー=マイヤー蒐儲品”が、“後にマリー=マイヤー蒐儲品となる品”の意味ではなく、E.グロッセとは關りなく“マリー=マイヤーが蒐儲致しおきし品”の意であるならば、E.グロッセは、晩くとも1893年末の段階迄にそれらの品を觀ていた筈と言い得るであろう。だが、この“藝術叢記”中の所謂“マリー=マイヤー蒐儲品”が具體的に何を指すのか不明なので、今はそれ以上の詮索を控える。因に、“Kunsthandbuch für Deutschland”(1897.; 第5版)の在フライブルク個人蒐儲の項には; マリー=マイヤー蒐儲品が下記の如く紹介されている;

“Frau Dr. Maria[e] Meyer. (Magar[Mozart]str. 5.), Sammlung Japanischer Kunstwerke: Gemälde, Töpfereien, Lacke, Metallarbeiten, Schnitzereien, Drucke(r. 1,000 Nrn.). Ferner moderne Gemälde (Böcklin, Thoma), Radierungen von M.Klinger, Bronzen und Handzeichnungen von Geyger.”(120頁).

このうちの附下線部(筆者所附)が東亞關係のもので、それは全て日本のものである。同書序文は1897年1月附で、その資料収集期限及びその刊行月が不詳なために、この“Töpfereien”中に前掲34頁脚註4.紹介の茶道用陶器が含まれているのか否かという点については要待考とせざるを得ない。或は同書第4版(第5版序文に據ると1886年刊)の、例えば“Kiel”乃至は“Hamburg”等の項を調べてみれば何か手懸りが得られるかと想うものの、当該版本に就ては筆者未見。孰れにしても、E.グロッセが1893年々末迄の段階で觀ることの出來た品は、この“Kunsthandbuch für Deutschland”(1897.; 第5版)所録品内に含まれている可能性が高い。

⁷ 林忠正に就ては、定塚1972., 同1981., および木々1987.参照。尚、木々1987.に就ては、村上彩子氏(筑摩書房)の御教示を得た(1993年)。記して感謝の意を表したい。

⁸ E.グロッセ“藝術叢記”には、林忠正から得た教示の數々が記されている。

⁹ マリー=マイヤーの生年、及び死亡月日に就ては不詳。その生年に就き、Elbs-May1971.は1834年とする(15頁)。彼女の出身地に就き、NDB- XVII(1993.)は、Heinrich Adolph MEYER(同書294- 5頁)の結婚(1854

れることは出来ぬ。彼女は、北西獨逸はエルベ河口に近いハンブルク市の有力商人にしてその後半生をキール市附近での海洋生物學研究に従事した夫君ハインリッヒ・アドルフ・マイヤー Heinrich Adolph MEYER (*1822.9.11.Hamburg,- †1889.5.1.Forsteck bei Kiel)¹⁰と1854年に結婚し¹¹、同夫君死亡の1889年々末には南西獨逸ライン河東岸のフライブルク市Freiburg i. Br.に南來して邸を構え¹²、同地における藝術活動全般に博く寄與するとともに、E.グロッセの東亞古美術研究とその資料収集活動の雙方を物心両面から支援した人物である¹³。

年)記載箇處において“Marie Louise Toberentz aus H.”と記す。この“H.”とはHamburgの謂と想われるが、ハンブルクの著述家を専録したSchröder 1870.(DBA- I, F.834, 1- 2.所收)のHeinrich Adolph MEYER項にはその妻を“Marie Toberentz aus Berlin”の如く、ベルリン出身と記載している。ベルリン・ハンブルク兩市共に大都市であり、人口も膨大、且つ教會數も多いために、そこから上記条件を満たす女性を捜し出すのは至難に近い。筆者が利用し得たハンブルク市關係資料はAB- Hamburg, f 1826.のみで、同書中にTOBERENTZ姓は見當らなかつた。ベルリン市關係資料は、1803年から1836年に至る聖マリエン教會St Marien教區における出生・洗禮記録の抽出・印字本(Genealogical Society 1976.)のみ乍ら、其處にはMarie Louise TOBERENZ (*1833.10.9., T 1833.11.24.), Johanna Amalie TOBERENZ (*1835.4.16., T 1835.5.24.)というTOBERENTZ家出自姉妹の出生・洗禮記録が記されていた(921- 2頁)。同抽出・印字本に據ると、彼女らの父はクリストフ・フリードリッヒ・トーベレンツChristoph Friedrich TOBERENZ, 母はカロリーネ・マティルデ・アヴィアヌスCaroline Mathilde AVIANUSである。このうちの姉マリー・ルイーゼの生年は1833年で、これは前引エルプス・マイ氏所記の1834年より1年早いものの、要精査対象人物であろう。尙、同じくベルリン生れの著名彫刻家Robert TOBERENTZ (*1849 - †1895.)とマリー・マイヤーとの關係に就ては未精査のため、要待考。

¹⁰ ハインリッヒ・アドルフ・マイヤーに就てはDBA., F.834: 1- 3., NDB- XVII(1993.)に詳し。因に、彼の妹アガテ・マルガレーテAgathe Margarethe(*1833.- †1876.)は、後の米國上院議員にして獨米協會初代會長カール・シュルツCarl SCHURZ (*1829.- †1906.)の夫人である。尙、當マイクロフィッシュDBA.とその續編DBA- NF.を含むザウル社製諸人名録集成に就ての総合索引が電腦情報(http://www.biblio.tu-bs.de/acwww25u/wbi_en/)として公表されていることに就ては、古田健一氏(丸善・金澤ナビゲーションセンター長)の御教示を得た。當総合索引に就ての消息入手によって仕事が如何ほど進展したか分らぬ。記して感謝の意を表したい。

¹¹ NDB- XVII(1993.), 294- 5頁, 及びDBA- I, F.834: 1- 3.

¹² AB- Freiburg, f 1890, IX 125頁

¹³ E.グロッセとマリー・マイヤーとの法的關係に就き、Elbs-May 1977.は兩者の間に法的養子縁組關係の存在を確認し得ぬとし(16- 7頁)、ファイト1992.は、そのプロイセン王立博物館への寄贈者を紹介する文章中において“[前略] 一九一五年のフライブルクのマリア・マイヤー夫人(養子エルンスト・グローセ氏による相續權放棄に基づく)によるものと、[後略].”(10頁)とし、Veit 1996.は、“Grosse [中略] mit seiner Adoptiv-Mutter Marie Meyer in Freiburg [後略] /グロッセは、フライブルクに住んでいた義母[特別な意味を込めて‘義母’と日語譯したのか、それとも‘養母’の誤植に過ぎぬのか不詳(筆者)]マリー・マイヤーとともに [後略]”(獨語22頁 / 日語19頁)の如く記す。筆者は、“Adoptiv-Mutter”という語は法的養子縁組關係を前提にして使う言葉ではないかと想うものの、展覽會圖録巻頭部での文章ということもあってかその

E.グロッセの東亞古美術収集活動は主として3類に大別し得るが、その初期の収集活動はこのマリー=マイヤー蒐儲品として結實した。この第1類のマリー=マイヤー蒐儲品は、彼女没後の1915年にその西洋美術部分をも併せてプロイセン王立博物館に寄贈され¹⁴、このうちの中國古代青銅器數十點、繪畫百餘點、および日本の茶道用陶器多數などからなる優品の數々はその後の幾度かにおよぶ展覽會や圖録作製などの折に展示・公表されていた¹⁵が、例えば殷代二里崗様式の盃¹⁶を含む中國古代青銅器などは、第2次世界大戦末(1945.)におけるソ連軍押収以來その姿を所謂西側研究者の前から消して久しい¹⁷。

第2類の収集活動は、E.グロッセがフライブルク市立博物館委員會 *Commission für die Städtischen Sammlungen*¹⁸委員 *Mitglieder* (在任期間: 1900.- 1908.)¹⁹として同博物館のために行な

根據が明示されておらず、且つ筆者もその直接資料、プロイセン國內法(兩名共に、バーデン侯國內に住むプロイセン王國人という狀況がその基本であろう。少くともフライブルク市檔案館 *Stadtarchiv* 所藏のE.グロッセ用住民票様カルテ[縦横大約18x16.5cm.; その住所欄への填記は“Mozartstr. 5.”のみで、日本から歸國後の“Jägerhäusle-weg 5.”(彼のフライブルク市における居處變遷に就ては次號掲載のⅢ.において紹介豫定)なる填記はなく、その書式も同檔案館所藏のヤス=グロッセ用カルテとは大分異なる]の“*Staats-angehörigkeit*”欄への填記は、“Preussen”), 及び當時の法の施行細則に就ては不案内のため、兩者の法的養子縁組關係の有無に就ては、今回は保留としておきたい。因に、“*Badisches Civilgesetzbuch (Landrecht)*”(1879.)の關聯條項は第343- 360條で、成人養子の場合、裁判所の公告後3箇月以内に、養父母側が自らの市民籍原本にその養子名を登録する *Büchern des bürgerlichen Standes eingetragen* ことによって法的手續は完了することになっていた(第359條)ので、假にバーデン國內法に従っていた場合には、當該原本を翻査すれば鮮りする筈乍ら、この點は未調査。尙、兩カルテ調査時には同館ウルリヒ=エッケル博士 *Dr. Ulrich ECKER, Oberarchivrat* の御協助を得た。記して感謝の意を表したい。

¹⁴ E.グロッセの死去を悼む1927年1月30日附“*Berliner Börsenzeitung*”紙掲載記事‘*Ernst Grosse als Kunstsammler*’中に記載あり。又、東亞古美術のみに就ては、例えばファイト1992.等の記述を参照。

¹⁵ 例えば Kümmel 1921., “*Ausstellung Chinesischer Kunst*”(1929.)など。

¹⁶ 例えば Kümmel 1928., Nr. 5(Tafel 5- 7)など。

¹⁷ “*Kunst Ostasiens*”(1963), Einführung [4]頁。尙、これらソ連軍押収品の少くとも一部の品はロシア共和國サンクト・ペテルブルク *St. Petersburg* のエルミタージュ美術館の倉庫に保管されていることが關係者によって確認されたとのことである(日本經濟新聞1993年2月14日)。又、Veit 1992., 19頁、及び Veit 1996., 23頁。又、1998年4月初旬(確か5日乃至6日と記憶)に南西ドイツで視た某ドイツ語テレビ局(局名忘記)のニュース番組は、ロシア議회가舊ソ連軍押収品を返還せぬ旨決議したことを伝えていた。筆者は今回の赴獨調査に際し、如し當古銅器類がドイツに返還されていればその調査を行ないたいと秘かに希っていたが、當消息、及びベルリン東洋美術館改修計劃着工準備を伝える弓場紀知氏(出光美術館)からの來葉(1998年4月初旬在獨受信)に接し、同博訪査を斷念し、當調査に専念することにした。多忙にも關らず御連絡下さった弓場氏に對し、記して感謝の意を表したい。

¹⁸ 同委員會は理事 *Vorstand* 1名と委員 *Mitglieder* 若干名から成り、その理事はフライブルク市總市長 *Oberbürgermeister* が兼務(例えば *AB- Freiburg*, f.1903, V.58頁)。

¹⁹ *AB- Freiburg*, f.1901, V.56頁, f.1902, V.56頁, f.1903, V.58頁, f.1904, IV.50頁, f.1905, IV.50頁, f.1906,

ったもので、この在任期間のうちの1902年から1908年にかけては委員長Direktorとしてその収集活動を主宰した。特にこの蒐儲品のうちの中國古代青銅器3點と所謂“Panthaka半託迦”・“Rähula羅吼羅”の東亞繪畫2軸は、林忠正が日本への歸國を控えた1903年にパリにおいて開催した競賣會の後にフライブルク市に將來されたもので²⁰、青銅鋳を除く4點の品は、その後の獨逸國內での展覽會や諸圖錄及び寫眞資料などのかたちで博くその概容が識られていた²¹。残念乍ら、この5點のうちの孟上父壺²²の蓋と殷周青銅斝²³に就ては、第2次世界大戰疎開用梱包時(1939.)から佛軍占領時期を経て同梱包開梱時(1960.)迄の間に行方不明になってしまったものの、爾餘の品々は現在でもフライブルク市立民族學博物館Städtisches Museum für Völkerkunde, Freiburg i. Br.(1997年からはその館名をアーデルハウザー博物館Adelhauser Museumと變更)に收藏・展示されている²⁴。

その第3類は、プロイセン王立博物館東亞藝術館のために主として1907年春から1913年夏にかけて日本をその調査・収集據點として東亞において行なった活動である。この東亞における調査・収集活動は、その後もその繼續を豫定し乍ら1914年8月の第1次世界大戰勃發とそれに引續く獨逸敗戦という事態によって中斷されたものの如くである²⁵。この調査・収集行は1908年3月以前と同年12月以降の前・後兩期からなり、このうちの前期(1907.2.25.²⁶- 1908.3.28.²⁷)は、1905年3月にパリを離れて歸國しその翌1906年4月に逝去した林忠正蒐儲品の整理をその主務としたものの如くであるが、後期(1908.12.4.²⁸- 1913.5.31.²⁹)は、駐日獨逸大使館(含・駐華獨逸公使館?)附

IV 51頁, f 1907, IV.51頁, f 1908, V.69頁

²⁰ Goo-Grauer 1995., Mochii 1995. 尙, Mochii 1995.執筆時に利用出來ずにいたフライブルク市の關聯檔案SA[StadtArchiv]- Freiburg, C3 237 / 3に就ては、今回訪査時に、同市廳在勤のユルゲン=アイヒホルスト氏Herr Jürgen EICHHORSTの御協助によって調査・確認することが出來た。加えて、同氏及び同夫人Frau Renate EICHHORSTは御自宅1層を提供のうえ、筆者在獨時の調査・研究を支援して下さった。1980年代以來の數々の御協助をも含め、此處にその旨を記し、改めて御禮申上げる。又、半託迦・羅吼羅兩語のローマ字表記に就ては、島岩氏(金澤大學文學部)の御教示を得た。記して感謝の意を表したい

²¹ 例えば、“Ausstellung Chinesischer Kunst”(1929.), 及び陳1946.所錄袁同禮在歐所蒐寫眞等。

²² 當器の器影は缺蓋状態で“Collection Hayashi”,II(1903.),No 1006として初出(解説は同書192頁)。又、陳1946.,圖51(有蓋), 及びMochii 1995.(缺蓋)等。尙, “Collection Hayashi”, II.(1903.)の利用に際しては、在臺北のエリック=ディエニーÉric DIÉNY久保恵子御夫妻の御協助を賜った。記して感謝の意を表したい

²³ 陳1946, 圖17

²⁴ Goo-Grauer 1995., Mochii 1995.

²⁵ Veit 1992, 17頁。

²⁶ “DJP日獨郵報”, V. Jahrgang No 48.(1907.3.2.),10頁, [Passagier-]Liste., N. D. L. Dampfer(北獨逸ロイド汽船會社<郵船>)“Prinzess Alice”號。

²⁷ “DJP日獨郵報”, VII Jahrgang No.2 (1908 4 11.),13頁, [Passagier-]Liste., N. D. L. Dampfer (北獨逸ロイド汽船會社<郵船>)“Prinzess Alice”號。

²⁸ 日本外交檔6門[人事]1類[官制及官職]8項[外國大・公使館員及領事館員]25號- 2.“在本邦各國大使館員任免雜件・獨國之部”中には、“(20)學術上専門家ドクトル・グロッセ自仝[明治]四十一年十二月”というE.グ

學術専門官 der Kaiserlichen Botschaft als wissenschaftlicher Sachverständiger attachiertとしての活動であった³⁰。この膨大な量に上ると想われる第3類収集品に就き、筆者は未だその全貌を完全には把握し得ずにいるが、その一端は、下記の如きE.グロッセの後期主要論著、

7. Die Ostasiatische Plastik, 1922, Seldwyla, Zürich.

8. Die Ostasiatische Tuschmalerei, Die Kunst des Ostens (Hrsg.; William Cohn), Band VI, 1922, Bruno Cassirer Verlag, Berlin.

及び現在のベルリン東洋美術館に連なる舊プロイセン王立博物館東亞藝術館の後継諸館々長によって編纂されたその所藏品・展覧會圖録などを通じて垣間見ることが出来る³¹。

E.グロッセが受けた初等教育に就ては不詳乍ら、中等教育は1881年秋迄マクデブルク市内の寄宿學校“Kloster Unser Lieben Frau”で受け³²、大學入學資格は、曾って大伯母の夫君が校長を務め大伯父や祖父もその教頭・教師職を一時期務めたことのある³³生地ステンダール市立中等學校 Gymnasiumにおいて1882年の秋に取得している³⁴。高等教育は、首ず1882年冬學期に首都のベルリン大學哲學部に入學(在籍期間: 1882/83, 1883/84, 1884/85, 1885, 1885/86, 1886)したうえで、

グロッセ個人檔が有り、その中に駐日獨逸大使ムム・フォン・シュヴァルツェンシュタイン MUMM von SCHWARZENSTEIN 發外務大臣伯爵小村壽太郎宛1908[明治41]年12月10日附書簡があつて、其處には“[前略] der ausserordentliche Professor an der Universität in Freiburg i. B. Dr. Grosse ist am 4. d. M. hierselbst eingetroffen. [後略]”の如く、E.グロッセが1908 [明治41]年12月4日附で着任したことを傳えている。

²⁹ “DJP日獨郵報”, XII. Jahrgang No.10(1913.6.7.), IX頁, Passagierliste., N. D. L. Dampfer (北獨逸ロイド汽船會社<郵船>)“Goeben”號。又、後掲40-1頁脚註41參照。

³⁰ ドイツ外交檔及び清末・民國外交檔に就ては未調査。駐華獨逸公使館附學術専門官であったのか否かという點に就き、獨逸外交檔等の公式文書による確認は行なっていないが、E.グロッセ本人も、その1924年10月1日(水曜)附“*Allgemeine Zeitung*”(Muenchen)紙夕刊掲載の‘Mein Anteil an dem Aufbau der Staatlichen Ostasiatischen Kunstsammlung in Berlin’なる記事中で、‘[前略], zum wissenschaftlichen Berater der Botschaft in Tokio und der Gesandtschaft in Peking ernannt, [後略]’の如く記している。因に、同記事は、同紙第1面を飾る‘Orientalistentag in München’という大見出しの許の執筆で、他の執筆者はF.ヒルト Professor Dr. Friedrich HIRTH及びM.ヴィンテルニッツ Professor Dr. M. WINTERNITZ (Prag)の兩名。又、ファイト1992.(10頁), Veit 1992.も同じく駐日・駐華兩使館附とす(13, 17頁)。

³¹ 例えば, Kümmel 1921., Kümmel 1928., “Kunst Ostasiens”(1963.), “ベルリン東洋美術館名品展”(1992.)等。

³² E.グロッセ發フライブルク大學哲學部長宛1888年8月8日附書簡(UA- Freiburg, B 38, Nr. 250.). 因に、當“Kloster Unser Lieben Frau”校は必ずしも全寮制という譯ではなく、“妹マルガレーテ”の夫君ヘルマン=ヒルトも同校で學んでおり(在學期間: 1875- 85), 學年は異なるものの、その在校時期は一部重なる。尙、UA[Universitätsarchiv]- Freiburgの使用に際しては、フライブルク大學檔案館のディーター=シュペック博士 Dr Dieter SPECKの御高配を得た。記して感謝の意を表したい。

³³ 本稿‘II. E.グロッセの家族とその家系’參照。

³⁴ Grosse 1887. 末尾の‘履歷 Vita.’には“[前略]. Postquam gymnasium Stendalii frequentavi, maturitatis testimonio munitus auctumno anni LXXXII. [後略]”とある。

バイエルン王国のミュンヘン大学(同: 1883), バーデン侯國のハイデルベルク大学(同: 1884)にも学び³⁵, 最終的には大伯父や祖父も通ったプロイセン王国のハレ大学(同: 1886/87)に学籍登録して“文藝學: その課題と方法 Die Literatur-Wissenschaft ihr Ziel und ihr Weg”(1887年, 前掲33頁初期主要論著 1.)なる論文を以て哲學博士號を取得した³⁶.

その職歴は1889年のフライブルク大学哲學學部 Universität Freiburg (Albert-Ludwigs-Hochschule), philosoph. Facultätの所謂私講師Privatdozent (在任期間: 1889- 1894)就任に始まり, 講授資格取得論文Habilitationsschriftは“ハーバート=スペンサーの不可知論Herbert Spencer's Lehre von dem Unerkennbaren”(1890.)³⁷であった. 1894年以降は同大学の助教授³⁸ ausser' ordentlicher Professor(同: 1894- 1921), 准教授Ordentlicher Honorar' professor (同: 1921- 1926)と昇任して, 1926年10月に正教授Ordentlicher Professor(同: 1926- 1927)に就任したものの, その3箇月餘り後の1927年1月26日に急逝している³⁹.

彼は50歳前後の日本滞在中にSUZUKI Yasu[鈴木ヤス?](⁴⁰*1890.12.22. Jzu, - †1947.3.23. Freiburg i. Br.)と結婚し⁴¹, エルナErnaという名の娘を一人もうけている⁴². 彼が日本から歸國した翌

³⁵ フライブルク大学々長事務局發バーデン州政府教育部宛1927年2月15日附文書(UA- Freiburg, B 24, Nr. 1111)は, 1883.10.- 1884.10.の期間を“在ベルリン軍役”としており, これに據れば1883年冬學期(1883/84)及び1884年夏學期はその軍役期間に當る.

³⁶ 彼の博士論文(Grosse 1887.)の扉, 及び巻末の‘履歷Vita.’に據る.

³⁷ 1890年, 前掲33頁所掲の初期主要論著2.と同一書名乍ら, その規模は大幅に縮小.

³⁸ 語義を重視すれば“員外教授”(例えば前掲38- 9頁脚註28等に於てはこの“員外教授”の譯語を使用)と譯す可きかとも想うものの, 本稿では, 敢て日本の現行職名中での近似職名を以て當てておく.

³⁹ フライブルク大学々長事務局發バーデン州政府教育部宛1927年1月27日附文書(UA- Freiburg, B 24, Nr. 1111).

⁴⁰ 明治四十二[1909]年十月三十日附“官報”號外・彙報・官廳事項: 市町村別現在人口(明治四十一[1908]年十二月三十一日現在)の簡査のみ乍ら, 1910[明治43]年前後の日本において, Jzu(伊豆?)という行政市町村名は東京府三宅島伊豆村のみのようなので, 現在の東京都三宅島三宅村伊豆の日蓮宗善陽寺住職山本政信氏宛て御訊ねしたところ(1999年9月19日附), 同25日附で御返辭を頂戴した. それに據ると, 同寺檀家の鈴木家に該當者は居らず, 1923[大正12]年生れで同地在住75年の御母堂や80餘歳の同地在住學識者もこれに該當しそうな話を聞いたことがないとのことであった. 早速の御教示に對し, 深く感謝の意を表したい 或は, 同じ伊豆諸島の某地, 乃至は伊豆半島の某處でもあろうか.

⁴¹ 彼等夫妻の結婚に直接關る資料は筆者未見のため, その婚姻年月日に就ては不詳. 但, E.グロッセ死亡後にフライブルク大学々長事務局からバーデン州政府教育部宛に提出された1927年2月15日附文書の添附書類2件の中に“結婚證明書有證譯Beglaubigte Übersetzung der Heiratsurkunde, 及びその原件 [後略]”という語句が見える(UA- Freiburg, B 24, Nr. 1111). 念の爲, 日本外交檔3門[通商]8類[帝國臣民移動]5項[旅券]8號“海外旅券下附(附與)返納表進達一件(含附與明細表)”の東京府・静岡縣・神奈川縣(1907.1.- 1913.12)分を簡査してみたが, “SUZUKI Yasu”に該當する人物は見出し得ず, 1913年5月31日横濱出航の“ケーベンGoeben”號乗船者名簿中に“グロッセ博士夫妻Herr Dr Grosse und Frau”(前掲39頁脚註29, “DJP日獨郵報”XII. Jahrgang No 10(1913 6 7), IX頁)という記事を認めた. 特別措置を考慮外とするならば,

1914年に勃發した第1次世界大戦とその後の劣悪な獨逸經濟,及び1921年頃から顯在化する彼の腸出血Darmblutungenは,その身體と家族3人の家計とを苦しめたようである. 彼自身スイスへの講演行を度々行なうとともに,フライブルク大學哲學部教授會の方でも彼に特別一時金を支給しつつその正教授への早期昇任を決議し,これをバーデン州政府教育部宛て少なくとも2度申請したものの⁴³,財政逼迫下における申請であったためでもあろうか,その實現には豫想

前掲“結婚證明書有證譯Beglaubigte Übersetzung der Heiratsurkunde,及びその原件[後略]”とは,外地において結婚した獨逸人に關する書類のことを指すのであろう. 尙,木々1987.にも“忠正の死後,ドイツ公[大]使館員の資格で日本に滞在したグロッセは,[林忠正の夫人]さと子の友人の安子と結婚して一女をもうけている”(276頁)とある.“安子”がドイツ語資料中の“Jasu / Yasu”であることは贅言を要しまい. 明治期生れの普通の日本女性の名前において,“某子”の如く,名末に子字を附す漢字名は希少例に屬し,本人も,訃報欄中で“ドクトル・フィロソフィー・エルンスト・グロッセ儀 去一月廿六日急病にて死去致候 間御通知に代え謹告仕候 ドイツ・フライブルク 遺族 グロッセ ヤス”(昭和2[1927]年2月22日附“時事新報”)の如く,“ヤス”と記す. 又,例えば筆者の母方の祖母の本間キヨ(*1900.小樽- †1994.小岩,舊姓井須)は戸籍名キヨ,普段の生活においても片假名のキヨを使っていたが,時に清子宛の郵便物を受信することがあり,又,差出人として清子と自署することもあった. 確か1960年代のことだったと記憶するが,不思議に想った筆者がその理由を訊ねたところ,“時には今様に”との答が返って來た. 未確認乍ら,恐らくグロッセ夫人の場合も類似例と考えて大過なからう.

⁴² 木々1987.には,“一九二八年(昭和三年),忠正の長男忠雄は,父の業績を訪ねてパリに滞在した. [中略]. 次いで彼はドイツに行き,前年[即ち1927年]の一月に亡くなったエルンストグロッセの未亡人安子と娘エルナとを訪ねた. エルナは十六歳になっていた.”(280頁)と記す. 當段は典據不鮮乍ら,同頁後段とその後の285頁に“忠雄の滯歐日記”という資料名が見えていることからすると,恐らく當段の典據も同一であろう. 尙,彼女の名前は“フライブルク市立高等女學校1924/25年年報”1年C組(VII. Klasse, C)の名簿中に“_Grosse Erna”(25頁)として見えている.

⁴³ フライブルク大學哲學部長發バーデン州政府教育部宛1921年12月19日及び1923年8月1日附提出文書(UA- Freiburg, B 24, Nr. 1111). 尙,このうちの一度(1923年8月1日附)は,獨逸語教師として日本の福岡から招聘の話があり,かかる頭腦流失を防ぐためには云々,という内容である. 當時の“福岡”での獨逸語教師と聽けば,開設後間もない“福岡高等學校”(例えば,“職員録”1923., 231頁)のことを想起する(校長・秋吉音治; 教授[定員24]20名中に1名“白川精一(在外研究中)”)とある)が,筆者未精査のため要待考. 又,前掲34- 5頁脚註4紹介の櫻井恆次郎(大澤岳太郎の養女・美津の夫君)も,東京帝國大學醫科大學助手在任中の1902[明治35]年に文部省留學生として赴獨し,在獨中に京都帝國大學福岡醫科大學助教授を拜命. 1906[明治39]年の歸國とともに教授に昇任(井關1922., 86頁, p.91)し,“職員録”1923.に據ると1923[大正12]年當時は九州帝國大學醫學部教授在任中(216頁)であったから,組織としての直接的關係は無いものの,彼も要精査対象者の一人であろう(餘談乍ら,同“職員録”同職在任者中には,法博・平田東助の甥,工博・伊東忠太の實兄・養父にして獨逸留學歸國組たる伊東祐彦も所録). もっとも, E.グロッセは日本滞在中(1907- 1913)の調査旅行時に數多くの日本人と面識を持った筈なので,豫斷は禁物. 又,時期からすると,1923[大正12]年9月1日に發生した所謂關東大震災の經濟的・心理的影響をも併考す可きであろう(同“職員録”1923.凡例冒頭には‘一. 大正十二年ノ職員録ハ七月一日現在ヲ以テ調製中震災ノ爲ニ全焼シタ

ERNST GROSSE 外の歳月を要した。
 1862 1927 彼が第1次世界大戦以後に再び東亞の地を訪れた(如し再訪し得たとす
 YASU GROSSE れば、それは今のところ1921年である可能性が最も高い⁴⁴)のか否か、現
 SUZUKI 状では不詳とすべきであろう。そして突然とも思える死が訪れ、その65
 1890 1947 歳の生涯を了えたのである⁴⁵。 筆者が1990年代にフライブルク市で仄
 聞したところに據ると、彼の遺體は火葬に付され、遺骨はその20年後の
 妻ヤスの葬儀の際に同市々營墓地Hauptfriedhof Freiburg内に一緒に埋葬されたとの由である。
 このグロッセ夫妻の墓は、同市々營墓地の略南に位置する墓地正門からその北の禮拜堂に向
 って延びる中央大路東沿の墓地正門から最も近い墓域區劃第56a號の北端に位置しており、約4m
 四方の墓域正面奥には自然石一枚を恰も衝立の如く配し、墓域中央稍々左寄りの處に頭を微か
 に擡げるように敷置した大略40cm.四方の墓石上には、左上の如き5行の文字が刻記されている。

このE.グロッセに就ての消息は、例えば“Wer ist's ?” III(1908.)- VIII(1922.) などをはじめと
 する同時代の獨逸所刊人名録中に散見し⁴⁶、NDB, DBA等その後の獨逸を代表する人名録中
 も登載されている⁴⁷。 他に、急逝直後の新聞・學術期刊等にも追悼文が幾篇か發表されている⁴⁸
 もの、E.グロッセその人に對する專論を試みた著書は、今のところパメラ=エルプス・マイ氏
 Frau Pamela ELBS-MAYの“フライブルクの民族學者エルンスト=グロッセ; 1862 - 1927”(1977.)⁴⁹

ルニ付已ムヲ得ス高等官同待遇以上竝ニ之ニ準スル者ニ限り更ニ十月一日現在調ヲ以テ編纂セリ.'とあ
 る)。 尙、“職員録”1923.の調査に際しては梶井重明氏(金澤大學圖書館)の御協助を得た。 記して感謝
 意を表したい。

⁴⁴ フライブルク大學民族學研究室所藏のE.グロッセ手稿の中には來函やパンフレットの裏面を使用し
 て書き記したものがあり、このうちの一葉“Ethnologie, Aufgabe der Ethnologie”(在 “Zu Vorlesung über
 Ethnologie”信封裡)裏面は、1921年3月末ハンブルク出航[日本郵船]“敦賀丸”の船室を手配済みなので渡航
 費用の50%を云々との文面(1921年2月24日附PHs. Van Ommeren (Hamburg) G. m. b. H.,某[署名]發Dr. E.
 GROSSE宛; PHs. Van Ommeren (Hamburg) G. m. b. H.社用22 x 27cm便箋)乍ら、これに相當する期間に就
 ての大學宛休暇願は、フライブルク大學檔案中に遺っていない。

⁴⁵ その死因は、“Grippe”(1927年1月28日附Vorwärts紙[Berlin]), “Kopfgrippe”(1927年1月29日附Neue
 Badische Landeszeitung紙[Mannheim])とのことで、逝去時の住所はフライブルク市東北郊イエガーホイス
 ル路Jägerhäusleweg 5番地である(彼のフライブルク市における居處變遷に就ては次號掲載のⅢ.において
 紹介豫定)。 季節柄、インフルエンザから腦炎を發患したのであろうか。 又、その訃報は約1箇月後に
 日本でも載告された(前掲40- 1頁脚註41参照)。 尙、筆者所見“Die Ostasiatische Tuschmalerei”の田澤坦
 (*1902.- +1986.)宛獻呈本の獻呈辭は、急逝9日前の1927年1月17日附(在フライブルク)である。

⁴⁶ “Wer ist's ?” III(1908.), S. 467, IV(1909.), S. 483, V(1911), S. 495, VI(1912.), S. 542, VII(1914.), S. 568,
 VIII(1922), S. 525.

⁴⁷ NDB- VII(1966.), S. 148-9, DBA- NF, F.484. 60-2

⁴⁸ 例えば, Bode 1927., Kühn 1927.など。

⁴⁹ このElbs-May 1977.は、筆者にとっては資料案内をも兼ねた著作であって、特にフライブルク時代のE.

のみのようである⁵⁰。この著書は、第2次世界大戦後の1960年代に同大學民族學研究室に就任したヘルツォーク教授Herr Prof. Dr. Rolf HERZOG指導下に行なわれた研究成果を纏めた修士論文で、特にフライブルク大學およびフライブルク市所管E.グロッセ關係檔案類を丹念に調べており、その後20餘年を経た今日では關聯法規變更等のためか筆者には實査出來なかつた資料をも参照して纏め上げた勞作である。だが、獨逸の東西分裂期という制約下での調査に加え、少くとも民族學・東亞美術史の兩分野に目を通さなくてはならぬといった困難とも相俟って、多面的活動家であったE.グロッセの諸側面を必ずしも描き出し得た譯ではなく、この點は、フライブルク市立民族學博物館創立100周年を記念して刊行された出版物のうち的一篇(Elbs-May 1995.)においても同様である。

他方、日本において行なわれたE.グロッセに對する研究は、皆無のようである。勿論、1930年代初頭に始る“大百科事典”，及び“西洋人名辭典”の初版以來⁵¹，その簡介は現在に至るまで繼續して行なわれ⁵²，特に1980年代以降は、定塚武敏・木々康子兩氏⁵³をはじめとする林忠正研究の中において、及び林忠正乃至ベルリン東洋美術館關係の展覽會圖録の解説中においても觸れられてはいた⁵⁴。だが、從來の日本においては、E.グロッセに就ての基本的情報が缺如していたことは勿論のこと、また或る意味で當然といえれば當然のことかもしれない、彼本人に對する關心そのものが極めて稀薄であったことも否めまい。

筆者は1993年に孟上父壺をはじめとするフライブルク市立民族學博物館所藏品を實査する機會を得て⁵⁵，その収集を主宰したE.グロッセに對する關心を強くした。美術品の傳世の次第を具體的に辿ることの重要性を再認識するとともに、19世紀後半のプロイセン王國主導下での獨逸帝國形成期にその青春期を過した人物が、一體如何なる背景及び經緯の許に獨逸における東亞古美術研究の先驅者の一人としての途を歩んでいったのかということをも是非識りたいと

グロッセの様子を調べる際には常に参照し、その恩恵を被った。記して敬意を表したい。筆者は本稿での論述に際し、同書の見解を引用・註記しつつ行なうという方法を採用せず、特に必要と考える場合以外はむしろ同書の指摘に據ってその存在を知り得たフライブルク市及びフライブルク大學所蔵の原資料に遡って記述するという方法を採用したが、これは偏に筆者の筆力の弱さに起因する。本稿では結果として同書の所見と必ずしも一致せぬ場合が出て來はしたものの、エルプス・マイ氏の仕事に對する敬意は變らない。本稿がE.グロッセの親族的背景と東亞における學術活動に焦點を絞った體裁を採り得たのも、フライブルク時代を中心とした同氏の研究が既存であることを前提とした結果である。

⁵⁰ この他、E.グロッセに就ての簡にして要を得た紹介文としてPfaff-Giesberg 1959.がある。

⁵¹ “大百科事典”VIII(1932.), 73頁, 西洋人名辭典(1932.), 354頁。

⁵² このうちの1940- 70年代の簡介としては、“世界大百科事典”VIII(1956.), 487頁(石川公一執筆), 矢代1961.(121- 2頁)などがある。

⁵³ 定塚1981.(尙, 定塚1972.は、E.グロッセに就て直接言及せず), 木々1987.

⁵⁴ 例えば、Veit 1992, 同1996.など。

⁵⁵ 當該調査時には、同博物館々長エーファ=ゲアハルツ博士Dr. Eva GERHARDS, 同館圖書室のアルムガルト=ゴー=グラウアー氏Frau Armgard GOO-GRAUERをはじめとする館員諸氏, 及び前掲弓場紀知氏の御協助を得た。記して感謝の意を表したい。

希った。幸い、筆者は日本の文部省在外研究員の選を得て、1997年12月初日から1998年9月末日に至る10箇月間を獨逸で過す機会に恵まれ、前掲エルプス・マイ氏所引諸資料或はその複印の多くを實見簡査することが出来(含・E.グロッセ自筆稿本の“藝術叢記”⁵⁶)、又、その一部に就ては

⁵⁶ フライブルク大學民族學研究室所藏のE.グロッセ遺稿類のうちには、精裝製本された縦横大約21x17.5cm、厚さ約1cm.の手稿ノートが5冊ある。これら5冊を同一名で一括して呼ぶ可きか否か検討の餘地は残るものの、當面、本稿ではこの5冊を一括して“藝術叢記”と假稱することにした。聊かの加工を行なうたうえで當5冊の外貌を示すと、略下記の如くである、

“藝術叢記”①(1894.- 1900⁺.); ‘I. *Japan Kunst & Kunstler*’

記録時期: 1894.9.14.- 1900.8.21, 1902.夏, 頁數: 1- 232, [232⁺¹]頁.

“藝術叢記”②(1896.- 1924.); ‘*Kunst & Kunstler*’

記録時期: 1896.11.22.- 1924.2., 頁數:[1- 232(147- 232未使用)]頁, 裏表紙ウラ.

“藝術叢記”③(1900 - 1906.); ‘*Chinesische und Japanische Kunst II.*’

記録時期: 1900.10.- 1906 12.13., 頁數: 1- 236(232- 6未使用), [Inhalt: 236⁺³]頁.

“藝術叢記”④(1907.- 1909.); ‘[*Sammlung des Vicomte Akimoto, Daimio von Kōzuke 22. IV. 1907.*]’

記録時期: 1907.4 22.- 1909 5.22., 頁數: 1- 192, [192⁺¹]頁.

“藝術叢記”⑤(1909.- 1912.); ‘[*Nihon no Bijutsu Kai - Uéno 20 / IV 09*]’,本稿所謂“Kunstabuch II.”

記録時期: 1909.4.20.- 1912.4.028., 頁數: 1- 161(120- 161未使用), [162- 190]頁.

このうちの③“藝術叢記”(1900.- 1906.)中には、E.グロッセ來日時のものと思われる如下3葉(孰れも日語印字箇處は左行横書、このうち〈b〉の切手貼附處には“内國には壹錢五厘切手 外國には四錢切手”とある)の未使用寫眞葉書が挾藏されており(1998年6- 9月現在)、

〈a〉寫眞面印字: (中尊寺寶物)金色堂内七賢壯巖螺鈿卷桂[柱?](願就成院發行)

宛名・通信面書込: “Chūsonji. / Konjikidō / >Innenansicht.< / Zu. Kunstbuch. II. / S. 19. H.”

〈b〉寫眞面印字: (中尊寺名勝)金色堂内陳(法橋定朝作)藤原氏三代ノ遺骸ヲ納ム”

宛名・通信面書込 “Chūsonji. / Konjikidō. / Figuren auf dem mittleren. / Altaraufbau
/ Zu. Kunstbuch. II. / S. 21.”

〈c〉寫眞面印字: (中尊寺)(甲種國寶)一字金輪物(願就成院發行)

宛名・通信面書込: “Chūsonji / Kura:- / Buddha Vajra Cakra. / angebl. von Unkei.
/ Zu Kunstbuch. II. / S. 23.”

この宛名・通信面には、“Zu. Kunstbuch. II S. ----”の如きE.グロッセの書込がある。他方、前掲第⑤冊にはその冊名が明記されておらず、従って、當面は同冊本文冒頭第1行の‘*Nihonn no Byutsu Kai - Uéno 20 / IV 09*’の名を以て呼ぶ可きかとも思うが、同冊の第19, 第21, 及び第23頁には各々當該3點(〈a〉・〈b〉・〈c〉)に就ての説明があり、E.グロッセ本人が當第⑤冊を指して“Kunstabuch. II.”と呼んでいたことは明らかである。或はその内容を同じくして時期も略々連続する第④, 第⑤の兩冊を“Kunstabuch”と總稱し、第④冊を“Kunstabuch. I”, 第⑤冊を“Kunstabuch. II”と分稱していたのではないかとも思うものの、確言は控えたい。既述の如く、E.グロッセ本人がこれら全5冊を一括して何と呼んでいたのかということに就ては検討の餘地があるものの、當面、本稿ではこの5冊を一括して“藝術叢記”と呼んでおく。尙、中尊寺寫眞葉書への書込と第⑤冊當該箇處との一致、及び第⑤冊を“Kunstabuch. II”と呼ぶ可きことに就ては、妻ス

轉寫・複印を許可され、前記フライブルク大學民族學研究室のヘルツォーク教授、エルプス・マイ氏⁵⁷、フライブルク市立アーデルハウザー博物館々長ゲアハルツ博士Dr. Eva GERHARDS、および同館圖書室のゴー・グラウアー氏Frau Armgard GOO-GRAUERなどから貴重な御話を伺うことも出来た。

E.グロッセが生まれ育った舊プロヴィンツ ザクセン州のステンダール市⁵⁸、同州々都のマクデブルク市、及びその南西約30km.のコッホシュテット市などを訪ねて關聯資料や諸遺蹟を見聞するとともに、E.グロッセ關聯教區民簿謄本DKB[Duplicat des Kirchen·Büches]やその祖父に關する在マクデブルク市の[新教プロヴィンツ]ザクセン教區宗務局Konsistorium der Kirchen·provinz Sachsen所藏個人檔案に就ての知見を得ることも出来、その簡査作業も一部行ない得た。歸國後、その簡査作業を續行しつつE.グロッセの“藝術叢記”の翻刻・添字・附註作業を進めるのと併行して、E.グロッセ在日當時の日本所刊“官報”、“DJP日獨郵報”、上海所刊“Ostasiatischer Lloyd 徳文新報”、“Shanghaier Nachrichten”⁵⁹、及び日本の外務省外交史料館所藏の諸資料(本稿ではこれを“日本外交檔”と簡稱)等を簡査した結果、E.グロッセの家系に就てはその曾祖父の代に遡る枠組を明らかにすることが出来たうえ、E.グロッセ本人の1907年から1913年にかけての東亞における學術活動の概容をも略知し得ることとなった。孰れの場合においても、その細部は未精査で、事實の確定には當然のこと乍ら詳細な考證を要し、“藝術叢記”に關する前記作業(未完)に就ては、分量の都合もあって、機會を捉えて別途公表せざるを得ぬため、今回は彼の家族及びその東亞への調査収集行に就て簡介することとした。

尙、本稿で利用した教區民簿謄本、即ちDKB⁶⁰は、ヴェストファリア王國及びプロイセン王國

イルケ=シェルマンSylke SCHERRMANNの指摘に據る。記して感謝の意を表したい。

⁵⁷ ヘルツォーク教授Herr. Prof. Dr. Rolf HERZOGは高齢にもかかわらずシュトゥットガルトから研究室へ御出かけのうえ御話を聴せて下さり、エルプス・マイ氏Frau Pamela ELBS-MAYは體調不良をおして筆者等の調査が捗るよう諸事御高配下さった。記して感謝の意を表したい。

⁵⁸ ステンダール市訪査時には、ステンダール・インフォルマツィオーンのミヒャエル=シュタンケ氏Herr Michael STANDKE, Stendal-Informationの御協助を得た。記して感謝の意を表したい。

⁵⁹ これら上海所刊兩紙の利用に際しては、岩井茂樹氏(京都大學人文科學研究所)の御協助を得た。記して感謝の意を表したい。

⁶⁰ このDKBを使った今回の作業に際してはユタ系圖協會Genealogical Society所藏のマイクロフィルムを使用した。E.グロッセの出生地がステンダール市であることは既知事乍ら、その所屬教區に就ては不明だったので、まずE.グロッセ誕生年(*1862.)前後の記録を含むステンダール市所在新教4教會教區民簿謄本の全てを普查し、彼の家がドームDom[即ち聖ニコライSt. Nikolai]教區所屬であることを突き止め、そこから今回の簡査作業を開始した。同協會の歐洲本部は在フランクフルトFrankfurt am Main乍ら、フライブルク支部のヴォルフガング=ズュース、ペトラ=ズュース父嬢Herr Wolfgang SÜß, A.G. Petra SUESSは舊東獨地域の教區民簿謄本の現状を熟知しておられ、その具體的且つ實踐的御教示の數々とともに、筆者の調査を支援して下さい。記して感謝の意を表したい。

この教區民簿謄本は筆寫本で、當然乍らその筆蹟は必ずしも一様ではない。筆者はその在獨中に、妻

政府が教會に對して發した命令に基づき、教會側が作製して政府關聯部署宛て提出したもので、その記載事項や書式は、時期および教區毎に必ずしも一様ではない。又、必ずしも教區民簿原本の忠實な複製ではない(例えば本稿 II., 48頁脚註9)うゑに、例えば、ステンダール市ドーム教會1815年教區民簿謄本結婚篇の子供欄にその父名が填記されている⁶¹など、明らかな誤記・誤轉寫の例も幾例か見かけた。然し、一層有効な利用可能資料も他に見出し得なかつたため、筆者はこの教區民簿謄本をその調査用基本資料とせざるを得なかつた。勿論、資料の内在的缺陷および不完全な點に對しては、細心の注意を拂つたつもりである。

又、如下2點に就ても豫め御斷りしておきたい。即ち、その第1は、本稿で取り擧げた人物の出生・洗禮・堅信禮・結婚・死亡などを表す際に、如下の記號や文字を使用したことで、

* 出生, T[au]fe]. 洗禮, C[onfirmation]. 堅信禮, ∞ 結婚, † 死亡,

その第2は、本號所引の電腦情報は、基本的には筆者が日本において1999年8-11月間に利用し得たものに限つたということである。その際、British Library, BVB, 及びDBI等の所謂アドレスに就ては、その検索頁號乃至はその検索頁への聯接方法の表示のみに止めた。検索時の諸設定を表記するのは煩瑣に過ぎるし、アドレスそのものを入力しても、例えば日本からの場合、その儘では必ずしも所期の検索頁を開き得ぬ場合があるからである。

S. シェルマンから2週間程その判讀の手ほどきを受け、何とかこれを判讀出来るようになったが、今回使つた資料の大半は筆者自身が在獨時に前後2度ほど簡査・轉寫した轉寫帳に基いているため、語頭大文字の特にA(例えば, *A*)・U(同*U*)・C(同*C*)・K(同*K*)・L(同*L*)・N(同*N*)・R(同*R*)などに就き、今となつては當時の判斷を聊か怪しむ箇處が皆無という譯ではない。この缺點を補う意味で、多くの資料を相互に比較しながら仕事を進めたつもり乍ら、活字化に際し、その論旨に深く關わるような誤りを犯していないことを祈念している。妻には、この他、特にドイツ語・ラテン語資料の調査・検討時に多大の協助を得た。この協助が無かつたならば當作業をこのような形では行ない得なかつたであらう。一時は共同執筆という體裁をも構想したが、いざ纏める段になると内容・體裁ともに細部において異論百出、そこで今回は、所詮は何事も個人的作業と互いに割り切ることに約し、筆者はこのような體裁及び内容での公表を選んだ妻には記して感謝の意を表するとともに、讀者諸兄姉の御瞭解を願ひ上げる次第である。尙、歸國後に柘植洋一(金澤大學文學部)、藤村泰司(國際大學日本語プログラム)兩氏を煩わせて、ヴァルデンフォント社製電腦用クレント クッパーシュティッヒ Kurrent Kupferstich, The Walden Font Co. 獨逸語筆記體フォントを入手した。如し赴獨前に當筆記體フォントを使つた打鍵訓練を集中して行なつていたならば、(勿論、同フォント及びその後に入手したりコー社製グロースファーター クレント Großvater Kurrent, Ricoh Co. LTD 等の筆記體用既製諸フォントと筆者所見DKB所用諸字體との間にも相違はあるが)、筆記體に對する識字訓練期間は大幅に短縮し得た筈である。不明と準備の周到ならざるを恥じると共に、記して兩氏の御協助に對して感謝の意を表したい。又、獨逸新教教會の組織概要、教會關係の術語及びその日語譯に就ては、志村惠氏(金澤大學文學部)の御教示を賜り、歸國後のDKB利用に際しては浦野雅子氏(ユタ系圖協會東京支部)の御協助を得た。孰れも記して感謝の意を表したい。

⁶¹ DKB- Stendal, Dom- 1815, Aufgebote, 頁號缺, Nro. 20. 同項では花婿の名前欄とその父名欄の雙方に“Joh. Christoph Große”と記すものの、關聯諸資料を比較すれば、この“Joh[ann]. Christoph Große”が父名であることは自明である

II. E.グロッセの家族とその家系

E.グロッセ、即ちエルンスト・カール・グスタフ=グロッセ Ernst Carl Gustav GROSSEは、1862年7月29日の午前8時15分に、プロイセン王國プロヴィンツザクセン州マクデブルク縣 Regierungsbezirk Magdeburg, Provinz Sachsen北部の要市ステンダールKreisstadt Stendalハルス街 Halsstraße¹288番地在住の父エルンスト・ルードヴィッヒ・フリードリッヒ Ernst Ludwig Friedrich(本稿では必要に応じて“父エルンスト”と簡稱)の第一子として生れた²。当時、“父エルンスト”はプロイセン王國陪席判事³Königlicher Gerichts-Assessor在任中⁴、母の名はクララ・ルイーゼ・アウグステ・シャルロッテ Clara Louise Auguste Charlotte(本稿では必要に応じて“母クララ”と簡稱)⁵、彼女の父フィリップ・グスタフ・アドルフ=ゲスリング Philipp Gustav Adolph GÖSSLINGは、同じマクデブルク縣西南部のコッホシュテット市Kreisstadt Cochstedt在住の“オーバーアムトマン”⁶Königl. Oberamtmannであった⁷。

¹ 當街路名に就ては、ステンダール市ドーム教會(即ち聖ニコライ教會)教區民簿原本KB[Kirchenbuch]- Stendal, Domの管理者ケーテ=ビショッフ氏 Frau Käthe BISCHOFFの御教示(1998.6.4.)に據る。記して感謝の意を表したい。尚、當該教區民簿謄本當該項(即ち, DKB- Stendal, Dom- 1862, Geborne und Getaufte, S. 12, No. 30)では“Hallstraße 288”[手書]とし、“Situations-Plan von Stendal. 1861.”でも“Hallstraße”[活字印刷]乍ら、E.グロッセの弟ハンス・オットー・アルベルト出生洗禮時のDKB- Stendal, Dom- 1865, Geborne und Getaufte, S. 15, Nr. 40では“Halsstraße 288”[手書]とし、近年の“ADAC Stadtplan: Stendal”(1996.)では“Hall- str.”とす。この混亂が、例えばHalsstraßeという聊か發音し難い點に起因するのか、或は別のことに由來するのか、今の筆者には判断がつかず、本稿では現地の方の御教示に遵った。

² DKB- Stendal, Dom- 1862, Geborne, S. 12, No. 30.

³ 安藤1972.の77頁前後には、マックス=ヴェーバー Maximilian Carl Emil WEBER(*1864.4.21.Erfurt,- †1920.6.14.München)が1880年代に“司法官試補”及び“陪席判事”資格を取得した頃のことを記されており、時代が聊か晚い點は懸念しつつも、本稿ではその譯語に遵った。因に、井上1909.でも“Gerichtsassessor, m. 陪席判事”(334頁)、“Referendar, m. 司法官試補”(703頁)とす。尚、ヒュウ・デ・グレー1890.とその原本(?) Hue de Grais 1882.を對照しつつ、1850- 60年代のプロイセン諸法令に遡り、その職務内容を把握したうえで譯語を確認す可きかとも思うものの、未着手。

⁴ DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1861, Aufgebote, S. 4, No. 13.

⁵ 同上。

⁶ 當例が實官なのか虚官なのかも不詳乍ら、本稿では、Ersch & Gruber 1819. “Amtmann”(426- 7頁), Ersch & Gruber 1830. “Oberamt”, “Oberamtmann”(共に53頁), Meyer 1865. “Amtmann”(I. 688頁), Brockhaus第14版. “Oberamt”(XII [1903.]. 498頁), “Amtmann”(I[1901.]. 557頁), Keiser1939 /41., “Cochstedt”(II. 451- 2頁), 成瀬1977.“四 家産官僚制の「近代化」と國庫主義”(38- 54頁), ハルトゥング1980., 114頁などの説明を勘案し、プロイセン王國直轄地 Domäne の經營請負者に授與された稱號の一種、の如く當面は理解しておく。因に、當コッホシュテット所在直轄地は計2地で、そのうちのひとつは1730年にそれ迄の騎士領 Rittergut を直轄化したもので、その収益の使途は[全期間を通じてか否か不詳乍ら], 傷痍軍人救済用に特定されていたという (Keiser1939/41., II. 451- 2頁)。フリードリ

E.グロッセの洗禮は、その誕生約1箇月半後の1862年9月15日にハルス街288番地の父家において行なわれ、その主宰牧師はコッホシュテット市聖ステファニーSt. Stephani教會の牧師Pastor ヨハン・フリードリッヒ・カール=グロッセJohann Friedrich Carl GROSSE、即ちその祖父(本稿では必要に応じて“祖父ヨハン”と簡稱)であった⁸。その洗禮時の代父母Taufpate全6名は如下で⁹、

1. [母方の祖父たる]“オーバーアムトマン”ゲスリング; 在コッホシュテット
Oberamtman Gössling in Cochstedt
2. [父方の祖父にして洗禮主宰者でもある]牧師グロッセ; 在コッホシュテット
Pastor Grosse in Cochstedt,
3. “アムツラート”¹⁰ラストロップ夫人; コッホシュテットから來會,
舊姓エンゲルブレヒト Frau Amtsrath Lastrop geb. Engelbrecht aus Cochstedt,
4. [父方の祖母たる]牧師夫人グロッセ; 舊姓クリューガー
Frau Pastor Grosse geb. Krüger,
5. [母方の祖母たる]“オーバーアムトマン”夫人ゲスリング
Frau Oberamtman Gössling,
6. 商人ゲスリング; ライプツィッヒから來會
Kaufmann Gössling aus Leipzig.

このうちの3.“アムツラート”ラストロップ夫人は、“母クララ”洗禮時における代父母筆頭者たりし“オーバーアムトマン”夫人エンゲルブレヒトの娘かその縁者であろう(後述53頁参照)。又、6.ライプツィッヒから來會せし商人ゲスリングに就ては未調査乍ら、その姓に據れば、恐らくは母方の縁者と想われる。尙、本稿での主人公エルンスト・カール・グスタフ=グロッセの諸名がその父と兩祖父の名に由來することも、これに據って明らかであろう。即ち、エルンストは父から、カールは父方の祖父から、そしてグスタフは母方の祖父に由來する。彼が三世代揃ったプロイセンの一家族の中にその長孫としての生を受け、恐らくは將來の家長たるべき者としての期待を寄せられるという家庭環境裡に成長したであろうことは想像に難くなく、この事實は彼を理解するうえで無視す可からざることと考える。

“父エルンスト”および“母クララ”に就ては、1871年の獨逸帝國成立前後に行なわれた司法組

ッヒ大王(在位: 1740- 1786)が、當時の先進國フランスに倣い、ベルリンに最初の傷痍軍人用施設Invalidenhaus(その外觀を示す銅版畫はKorff 1981., [Raum]10/ 57[190, 192頁]として縮小再録)を完成させたのは、1748年のことという(Brockhaus第14版, IX[1902.]. 665頁)。或はかかる施設の建設運営費等にも關るか? 尙、成瀬1977.を再録した成瀬1988.及びハルトゥング1980.の兩書に就ては、田中俊之氏(金澤大學文學部)の御教示を得て借覽することが出来た。記して感謝の意を表したい。

⁷ DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1861, Aufgebotene, S. 4, No. 13.

⁸ DKB- Stendal, Dom- 1862, Geborne, S. 12, No. 30.

⁹ KB- Stendal, Dom. 當項もビショッフ氏の御教示に據る(前掲47頁脚註1参照)。又、DKB- Stendal, Dom- 1862, Geborne, S.12, No 30. 但、教區民簿謄本DKB- Stendal, Dom- 1862では本文中の下線部を缺く。

¹⁰ 前掲47- 8頁脚註6参照。

織改革や現今の個人情報開示制限などのために、その経歴は辿り難い。特に“母クララ”に就てはその没年すら不明で、両者に就て解ったのは以下の略歴に過ぎぬ。

即ち、“父エルンスト”は1831年1月4日に、当時ステンダール市ドーム教會協力牧師 Hilfsprediger をしていた父ヨハン・フリードリッヒ・カール(即ち、“祖父ヨハン”)と母ヘレーネ・ルイーゼ・ユーリエ・アグネス Helene Louise Julie Agnes(本稿では必要に応じて“祖母ヘレーネ”と簡稱)の子として生まれ¹¹、その兄弟姉妹のうち、筆者が確認し得た者としては、

◇ヨハネ・マリー・ルイーゼ Johanne Marie Louise(*1823.5.15.Stendal¹²- †?),

◇ハインリッヒ・グスタフ・カール Hein. Gust. Carl
(*1824.8.2.Stendal¹³, C.1840.Stendal, †?)¹⁴,

◇オットー・ゲオルク・ハインリッヒ・テオドール Otto Georg Heinrich Theodor
(*1826.8.25.Stendal¹⁵- †?)¹⁶,

◇ハインリッヒ・ツェザール・ベルンハルト Heinrich Caesar Bernhard
(*1834.7.,∞1864.5.29., Baumeister, Halberstadt)¹⁷

など都合4男1女を算えるが、その父、即ち“祖父ヨハン”死亡時(†1872.)に“祖母ヘレーネ”と共に遺族として算えられた者は、“父エルンスト”といま一人の息子のみであった¹⁸。

この“父エルンスト”が如何なる教育を受けたのかは鮮りしない。その父“祖父ヨハン”の如くステンダール市内の教區學校に通った(後述60頁参照)のか、それとも“祖父ヨハン”の1836年に始まる教區赴任に随い、その前半の任地たるマクデブルク市西方約30km.に位置するヴェーフェンスレーベン Wefensleben (在任期間: 1836- 1850¹⁹)、及びその北隣のベルスドルフ Belsdorf

¹¹ DKB- Stendal, Dom- 1861, Aufgebote, S. 6, Nr.[17]に“geb. 4. Januar, 1831.”とある。又, DKB- Magdeburg, Dom- 1861, Aufgebote, S. 10, Mo. 46も同内容。但, DKB- Stendal, Dom- 1831, Geborneには記録。

¹² DKB- Stendal, Dom- 1823, Geborne und Getaufte, S. 19, Nro. 19.

¹³ DKB- Stendal, Dom- 1824, Geborne und Getaufte, S. 41, Nro. 41.

¹⁴ DKB- Stendal, Dom- 1840, Confirmirten, Zahl 1.に、“その父はベルスドルフの説教師 der Vater ist Prediger, Belsdorf.”とある。

¹⁵ DKB- Stendal, Dom- 1826, Geborne und Getaufte, S. 9, Nro. 39.

¹⁶ “第3代書籍商ゲオルク”の長女ゼルマ洗禮時(1872.)の代父母第1位として“Frau O. Große sen.”という記載がある(DKB- Stendal, Dom- 1872, Geborne und Getaufte, S. 17, Nr. 124.)。この年長のO[tto]. Groß[ss]e夫人とは彼の夫人を指すのではあるまいか。

¹⁷ DKB- Cochstedt, St. Stefanie- 1864, Aufgebote, S. 2, No. 5/6。但, DKB- Stendal, Dom- 1831, Geborneにはその記載を缺く。

¹⁸ “Er hinter-läßt seine Ehefrau und zwei majoren Söhne.”(DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1872, Gestorbene, S. 26, Nr. 10.)。いま一人の息子に就ては、末弟ツェザール(在ハルバーシュタットの建築匠 Baumeister)なのではとも思うものの、ハルバーシュタット市關聯資料は筆者未見。又, 此處で謂う“Baumeister”が“Dom Baumeister”であるか否かに就ても未確認。

¹⁹ DKB- Wefensleben, 1836- 1850.

(同: 1836- 1850²⁰) の孰れかに於てその幼少期を過ごしたのか、或はもっと別の教育を受けたのか、その委細は不詳である。

彼の場合も、普通15歳頃に行なわれる堅信禮Confirmationを済ませ、兵役も了えた筈乍ら²¹、彼がその成人後に初めて名前を現すのは、1860年1月29日コッホシュテット市聖ステファニー教会で行なわれたマルタ・クララ・アンナ=ゲスリングMartha Clara Anna GÖSSLINGの洗禮式における代父母筆頭者としてである²²。其處には“エルンスト=グロッセ氏、在ベルリンの陪席判事 Herr Ernst Grosse, Gerichtsassessor zu Berlin”と記した行の下に“その代理として當該兒の父親 vertreten durch den Vater des Kindes.”なる1行が加えられている²³。急用出来のため出席出来なくなったのであろうか。因に、當洗禮式における代父母第2位はその翌年に彼と結婚することとなるクララ・ルイーゼ・アウグステ・シャルロッテ=ゲスリング嬢²⁴、即ち洗禮を受けた子供の長姉であった。この洗禮を主宰して教區民簿謄本の當該箇處を記したのは、その署名および筆蹟に據れば、同教會の牧師にして當兒代父母筆頭者の父たる“祖父ヨハン”であることは間違いなく²⁵、この時既に二人の婚約は整っていたものと考えて大過あるまい。

この二人は1861年10月28日に結婚し²⁶、

◇エルンスト・カール・グスタフ (*1862.7.29.Stendal²⁷- †1927.1.27.Freiburg i. Br.),

◇マックス・ハインリッヒ・フリードリッヒ・アウグスト

Max Heinrich Friedrich August(*1864.1.13.²⁸- †1864.3.21.²⁹, 孰れも Stendal),

◇ハンス・オットー・アルベルト Hans Otto Albert(*1865.6.27.Stendal³⁰- †?),

◇エリーザベト・クララ Elisabeth Clara

(*1867 [Magdeburg?]³¹- †1868.5.7.Cochstedt³²),

²⁰ DKB- Belsdorf, 1836- 1849. 尙, DKB- Belsdorf, 1850, 1851は筆者未見。

²¹ 當時のDKB- Cochstedt, DKB- Belsdorfなどの中にはその名を見出せなかった。資料の散逸に起因するのか、或は例えば父が堅信禮を執行した牧師その人であったが故なのか不詳乍ら、その結婚時のDKB- Cochstedt, St. Stephani- 1861, Aufgebote, S. 4, No. 13には“ev[angelisch]. Conf.”とある。

²² DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1859, Geborne und Getaufte, S. 14, Nr. 85.

²³ 同上。

²⁴ 同上。又、筆者未見の同教區民簿原本も當然“祖父ヨハン”の手になったものと想定している。

²⁵ “祖父ヨハン”の筆蹟に就ては、在マクデブルク市の[新教プロヴィンツ]ザクセン教區宗務局所藏 J.F.C.グロッセ個人檔(Rep Aspec Pers, Grosse, G39, Archiv Evangelische Kirche der Kirchenprovinz Sachsen, Magdeburg)中に遺る本人の筆蹟、及び彼のヴェーフェンスレーベン、ペルスドルフ、コッホシュテット在任期間所製DKB各冊冒頭或は各篇末尾等所記の本人署名などに據り確認。

²⁶ DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1861, Aufgebote, S. 4, No. 13., DKB- Magdeburg, Dom- 1861, Aufgebote, S. 10, No. 46., DKB- Stendal, Dom- 1861, Aufgebote, S. 6, No [17].

²⁷ DKB- Stendal, Dom- 1862, Geborne und Getaufte, S. 12, Nr. 30.

²⁸ DKB- Stendal, Dom- 1864, Geborne und Getaufte, S. 9, Nr. 4

²⁹ DKB- Stendal, Dom- 1864, Gestorbene, S. 20, Nr. 15.

³⁰ DKB- Stendal, Dom- 1865, Geborne und Getaufte, S. 15, No. 40.

◇マルガレーテ Margarete (*1871.,∞1894.Magdeburg,† ?;

本稿では必要に応じて“妹マルガレーテ”と簡稱)³³

など少くとも3男2女をもうけ、このうちの第2児マックスが生後2箇月で夭逝し³⁴、第4児エリーザベトが“母クララ”の實家で急死して同地の児童墓地第1144號に埋葬され³⁵、第5子マルガレーテがマクデブルク市出身の印歐語學者ヘルマン A. =ヒルト Hermann A. HIRT (*1865.12.19. Magdeburg³⁶ - †1936.9.12.Gießen³⁷)の許に1894年に嫁して1男1女をもうけ³⁸、1927年にその長兄エルンスト(即ち、本稿のE.グロッセ)の死亡届をフライブルク市宛提出³⁹したこと等を除くと、他の子供達の様子は鮮りしない。

“父エルンスト”は、既述の如く、晩くとも長子エルンスト誕生の1962年にはその父ヨハンの生れ育ったステンダール市において、ハルス街288番地の家に住み、同市所在の裁判所に陪席判事として勤務していた⁴⁰。その司法官退任の時期、およびマクデブルク市への轉入の経緯に就ては不詳乍ら、1892年末の時點において、マクデブルク市ヴェルフト街35-b番地某樓2階

³¹ DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1868, Gestorbene, S. 27, No.17. 其處では、彼女の死亡を伝える際に、“Elisabeth Clara Grosse, ehel. Tochter des Assessors Ernst [Ludwig Friedrich] Grosse zu Magdeburg. [後略]”と記す。

³² DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1868, Gestorbene, S. 27, No.17.

³³ “Wer ist’s ?” VIII(1922.), S. 660のヒルトの項には、その結婚日を“16. IV [18]94”としたうえで、その相手に就き“Margarete Große, T. d. Vers. Dir. F. Gr. u. d. Clara Gößling.”と記し、NDB- IX(1971.), S. 235- 6のHIRTの項でもその結婚に関して“Magdeburg 1894 Margarete (*1871), T. d. Versicherungsdir. Ernst Große (1831- 1911) u. d. Clara Auguste Louise Gößling”としている。だが、曾って“父エルンスト”達の結婚が記録されたマクデブルク市ドーム教會の1871年教區民簿謄本には彼女の出生・洗禮に関する記録が見當らず、この前後數年分のDKB- Magdeburg, Geborne und Getaufte にもグロッセ家の子供の誕生を伝える記事はない。

³⁴ DKB- Stendal, Dom- 1864, Gestorbene, S. 20, Nr. 15.

³⁵ DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1868, Gestorbene, S. 27, No.17.

³⁶ “Wer ist’s ?” VIII(1922.), S. 660.

³⁷ NDB- IX(1971.), S. 235- 6.

³⁸ “Wer ist’s ?” VIII(1922.), S. 660にはHermann(*1895.)とEva(*1896.)とあり、このうちのHermannは、NDB- IX(1971.), S. 235- 6には戦死者と印されている。

³⁹ Elbs-May 1977, S. 3. 尙、同論文ではこの届出をした“妹マルガレーテ”の名を“Bertha”とするが、1998年9月にフライブルク市役所の擔當部局窓口でその原件閲覧を申請したところ謝絶されたので、試みに當方の質問理由を説明のうえ“Berthaか、Margareteか?”と訊ねたところ、口頭乍ら“Margarete”との回答を得た。

⁴⁰ 既述の如く、1860年1月29日時點では“在ベルリンの陪席判事”(DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1859, Geborne und Getaufte, S. 14, Nr. 85.). 又、1861年10月28日時點では“在ステンダールの陪席判事”(DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1861, Aufgebote, S. 4, No. 13.)の如く記されている。筆者は當時のGerichts-Assessor陪席判事の勤務形態およびその居住形態の詳細に就て不案内のため、この記載内容の違いが彼の居住地變更を伴うものなのか否かは不詳乍ら、少くともE.グロッセ誕生當時の本務地がステンダール市所在の裁判所であったと見做して大過あるまい。尙、筆者所見のステンダール市街地圖“Situations-Plan von Stendal”(1861.)は、地番の文字が小さくその色も褪せて不鮮明なため(書込みか?)、街路名の確認は出來たものの、288番地の具體的位置に就ては鮮りしない。

Wertstr. 35b.II.⁴¹に住み、同市舊市街區ブライテ路7及び8番地Breite Weg. 7 u. 8.の一樓中にその事務所を構えるマクデブルク ハーゲル保険組合・マクデブルク“ヴィルヘルマ”普通保険組合兩組合の支配人Director der Magdeb. Hagelversicherungs-Ges. und d. “Wilhelma”, Allgem. Versich.-Actien-Gesellschaft in Magdeburg.⁴²を勤めていたことは確かで、E.グロッセの博士論文の獻辭及び履歷中に謂う“Versicherungs Director”とは、このことを指すと見て間違いなからう。

因に、この1892年當時、その2年後に末娘(?)マルガレーテ、即ち“妹マルガレーテ”の夫となるヘルマン=ヒルトの家では、大工匠Zimmermeisterたりし父カール・ハインリッヒ・ヘルマンKarl Heinr. Hermann(*1832.- †1891.)⁴³亡く、母ベルタBertha; 舊姓ボルマンBOLLMANN(*1832. Halberstadt⁴⁴- †1922.⁴⁵)がヴィッテンベルガー街Wittenbergerstr.3番地において建築業及び材木商Zimmergesch. und Holzhandlungとして一家を切り盛りしていた⁴⁶。既述の如く、E.グロッセのフライブルクへの轉入は1888年1月附で、その轉出地はマクデブルク市である⁴⁷。この事實は“父エルンスト”のマクデブルク市轉入が1887年以前であることを示していよう。又、E.グロッセの回想(前掲35頁脚註6.)に據れば、1870年代後半(E.グロッセ15歳時のことと假定して單純計算すれば1877年)には既に在マクデブルクだった筈であり、更に、前掲51頁脚註32.に紹介した第4子エリーザベト・クララ死亡時のコッホシュテット市聖ステファニー教會の記録にある“在マクデブルクの陪席判事エルンスト[・ルードヴィッヒ・フリードリッヒ]=グロッセ”の“在マクデブルク”が“父エルンスト”のマクデブルク市在住を意味しているとするならば、そのステンダール市からマクデブルク市への轉出入は1868年以前ということになる。

尙、“父エルンスト”はE.グロッセ東亞調査収集行中の1911年没⁴⁸とのことであるが、その最終

⁴¹ AB- Magdeburg, f- 1893, S. II. 105.

⁴² 同上。尙、同書 S.I. 46, IV. 52-3に據ると、例えばマクデブルク ハーゲル保険組合Magdeb. Hagel- versicherungs- Ges.の場合、その構成は上から順に; 取締役會Verwaltungsrath(9名)・總支配人General Director(Herr Dr. Hahn)・支配人Director(Grosse)・副支配人Sub-Director(Ed. Koch)・---, の如し。

⁴³ NDB- IX(1971.), S. 235- 6.

⁴⁴ 彼女の父カール=ボルマンCarl BOLLMANNは、NDB- IX(1971.), 235- 6頁にハルバーシュタットの自營農民Landwirtとある。

⁴⁵ “Wer ist's ?”VIII(1922.), S. 660のHIRTの項は、その母親を“M. Bertha Bollmann †.”と記す。

⁴⁶ AB- Magdeburg, f.- 1893, S. II. 135. 尙、この他に同市ディースドルファー街 Diesdorferstr. 18番地には、郵便局書記Post-Sekretärのルドルフ=グロッセ博士Dr. Rudolf GROSSEという名前が見える(AB- Magdeburg, f- 1893, S. II. 105.). 後述59頁の如く、ステンダール市の“第3代書籍商ゲオルク”の子供にもルドルフ(*1879.1.12)がおり、“17及び18世紀のプファルツ選帝侯國における郵便事業Das Postwesen in der Kurpfalz im 17. und 18. Jahrhundert”[Grosse(R.) 1902.]なる論文を以てハイデルベルク大學から博士號を取得しているが、その年齢から判断すれば兩者は別人である。尙、後者のルドルフに就ては、Grosse(R.) 1902. 附載“履歷Lebenslauf ”冒頭に、‘Am 12. Januar 1879 wurde ich, Rudolf Grosse, als Sohn des Buchhändlers Georg Grosse zu Stendal in der Altmark geboren. [後略]’とある記事に據った(又、後述59頁参照)。

⁴⁷ E.グロッセ用住民票様カルテ(フライブルク市檔案館所藏、本稿36- 7頁脚註13.参照)。

⁴⁸ NDB- IX(1971.), S. 235, “Wer ist's ?”VIII(1922.), S. 660.

居住地および墓地の所在地に就て筆者は知らぬ⁴⁹。

他方、“母クララ”は1841年7月1日午後7時にコッホシュテット市在住の直轄地経営請負者[?]Ökonom フィリップ・グスタフ・アドルフ=ゲスリング(*1821.?- †1868+)とヴィルヘルミーネ・マリー・ルイーゼ; 舊姓ロイプケ Wilhelmine Marie Louise, geb. REUBKE(*?- †?)をその父母として生まれた⁵⁰。洗禮はその一箇月半後の8月15日に行なわれ、

1. “オーバーアムツマン”夫人エンゲルブレヒト Frau Oberamtman Engelbrecht,
2. カウリッツ夫人 Mad. Kaulitz,
3. 牧師夫人ブットシュテット Pastorin Buttstedt,
4. “アムツラート”ラストロップ氏 H[err] Amtsraath Lastrop,
5. □長ルイス=ラストロップ氏 H[err] Director Louis Lastrop,
6. フリードリッヒ=ゲスリング氏 H[err] Friedrich Gössling,

その洗禮時の代父母6名の名前および肩書は、如上である⁵¹。このうちの代父母筆頭者を務めた1.“オーバーアムツマン”夫人エンゲルブレヒトは、E.グロッセ洗禮時の代父母第3位ラストロップ夫人;コッホシュテットから來會、舊姓エンゲルブレヒト Frau Amtsraath Lastrop geb. Engelbrecht aus Cochstedtの母親か少くともその縁者であろう。4.“アムツラート”ラストロップ氏⁵²および 5.□長ルイス=ラストロップ氏もその一族と想われる⁵³。又、代父母第3位の“Pastorin Buttstedt”とは、この洗禮を主宰したブットシュテット牧師“der Prediger Buttstedt”⁵⁴の夫人を指すとして大過あるまい。

“母クララ”(*1841.7.1.⁵⁵)には、孰れもコッホシュテット生れの如下4弟妹がおり、

⁴⁹ マクデブルク市がその最終居住地であったと假定すれば、同地におけるグロッセ家の所屬教區は、その結婚の告示と記録の遺るドーム教會である可能性が高いと想い調べてみたものの、筆者が簡査し得た同教會教區民簿謄本(1858- 1871年分のみ)中には“父エルンスト”夫妻の結婚に関する記録しか見出し得なかった。結婚時にドーム教會でその告示と記録が行なわれた理由は、國家公務員の結婚に際してその組織の長たる在マクデブルク控訴院總長 Chef. Präsident des Appelations- gerichtes zu Magdeburgの承認が必要であった關係上ということなのであって、マクデブルク時代のグロッセ家の教區は或は別の教區であったのかもしれない。

⁵⁰ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1841, Geborne und Getaufte S. 4, No. 29.

⁵¹ 同上.

⁵² 10年後の1851年に行なわれた弟アルベルト・クレメンス・アウグスト・ルードヴィッヒ洗禮時の代父母(全5名)欄には如下の記録がある;

5. “アムツラート”アウグスト=ラストロップ氏 Herr Amts- rath August Lastrop.

(DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1851, Geborne und Getaufte S. 11, Nr. 34.)

⁵³ 法律關係者 Philipp LASTROP (*1717.- †1752.), Philipp Heinrich LASTROP (*1750.- †1801.)等との關係に就ては筆者未調査.

⁵⁴ 例えば1843年用聖ステファニー教會教區民簿謄本誕生篇末尾(9頁)には“[前略], Kochstedt den 14 Januar der Prediger Buttstedt. 1844.”とあり、後述の如く、彼の後任が“祖父ヨハン”である。又、DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1841, Geborne und Getaufte S. 4, No. 29.

⁵⁵ DKB- Stendal, Dom- 1861, Aufgebote, S. 6, Nr. [17].

◇ヨハネ(通稱“アンナ”)・マティルデ・エルネスティーネ Johanne(Vulgo “Anna”)
Mathilde Ernestine (*1843.12.26.⁵⁶,C.1859.4.17.⁵⁷,∞1865.4.18.⁵⁸),

◇コンスタンティン・カール・アウグスト
Constantin Carl August (*1845.11.14.⁵⁹- †1846.7.22.⁶⁰),

◇アルベルト・クレメンス・アウグスト・ルードヴィッヒ
Albert Clemens August Ludwig(*1851.5.13.⁶¹- †?),

◇マルタ・クララ・アンナ Martha Clara Anna(*1859.12.25.⁶²- †?),

“母クララ”が皆のなかの最年長者だったようである。このうちのコンスタンティンは1846年に生後8箇月で死亡し⁶³, 直ぐ下の妹, 即ち通稱“アンナ”は1865年4月18日に在ヴォルミルスレーベン⁶⁴の砂糖工場経営者カール・アドルフ=ヨルダンCarl Adolf JORDAN, Zuckerfabrikant zu Wolmirslebenと結婚している⁶⁵.

“母クララ”本人の堅信禮記録は未搜到乍ら, 既述の如く, 1860年1月29日に行なわれた妹マルタ・クララ・アンナの洗禮時における代父母第2位に“クララ=ゲスリング嬢 Jungfrau Clara Gössling”としてその名を現し, 翌1861年の10月28日に“父エルンスト”と結婚して少くとも3男2女をもうけたものの, その第5子マルガレーテ出産(*1871.⁶⁶)以降, 彼女に関する記録を筆者は未だ目にしていない。

扱, “祖父ヨハン”, 即ちヨハン・フリードリッヒ・カール(*1794.9.15.Stendal⁶⁷- †1872.2.22. Cochstedt⁶⁸)は, 1794年9月15日に, 当時エルベ河を隔てて東隣するブランデンブルクと共にプロ

⁵⁶ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1843, Geborne und Getaufte S. 9, Nro. 69.

⁵⁷ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1859, Confirmirte Nro. 22. この時点での父親ゲスリングの肩書は“Königl. Domänenpächter”である。

⁵⁸ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1865, Aufgebote S. 2, No. 5.

⁵⁹ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1845, Geborne und Getaufte S. 7, No. 58.

⁶⁰ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1846, Gestorbene S. 4, Nro. 28.

⁶¹ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1851, Geborne und Getaufte S. 11, Nr. 34

⁶² DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1859, Geborne S. 14, Nr. 85. 尙, この時の父親ゲスリングの肩書は“Königl. Oberamtman”.

⁶³ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1846, Gestorbene S. 4, Nro. 28.

⁶⁴ ヴォルミルスレーベンWolmirslebenはコッホシュテット市から東北方マクデブルク市へ向って約9kmに位置し, エルベ河の一支流ボーデBode河の東北畔に在る

⁶⁵ DKB- Cochstedt, St. Stephani, 1865, Aufgebote S. 2, No. 5.

⁶⁶ “妹マルガレーテ”の出生記録に就ては前掲51頁脚註33を参照されたい。

⁶⁷ 在マクデブルク市の[新教プロヴィンツ]ザクセン教區宗務局所蔵 J.F.C.GROSSE個人檔中の1818年1月21日附自筆履歷書. 又, DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1872, Gestorbene.には死亡日を“1872年2月22日”と記し, その年齢を“77歳5箇月7日”とする。

⁶⁸ DKB- Cochstedt, St. Stephani- 1872, Gestorbene, S. 26, Nr. 10. 尙, 遺族は妻と成人した息子2名で, 死因は“リュ

イセン王國の最重要行政區であったアルトマルク Altmarkの首府Hauptstadtステンダール市において書籍商“フランツェン ウント グロッセ” Buchhändler “FRANZEN und GROSSE”を営む父ヨハン・クリスティアンJohann Christian(*1747. 2.⁶⁹- †1836. 5. 7. Stendal⁷⁰, 本稿では必要に応じて“曾祖父ヨハン”と簡稱)と母ドロテー・マリー・マルガレーテ; 舊姓フランツェンDorothee Marie Margarethe, geb. FRANTZEN⁷¹(*?- †?, 同“曾祖母ドロテー”と簡稱)との間に誕生した。彼には、少くとも如下1兄2姉1弟がおり、

◇ゲオルク・フリードリッヒ・ヴィルヘルム

Georg Friedrich Wilhelm (*1784.7.10.Stendal- †1852.11.13.Stendal,

本稿では必要に応じて“大伯父ゲオルク”と簡稱)⁷²,

◇ヴィルヘルミーネ・マリー・ドロテー・エルネスティーネ Wilhelmine Marie Dorothee

Ernestine(*1786.5.17.Stendal⁷³, ∞1809.8.18. Stendal⁷⁴, †1857.9. 16. Stendal⁷⁵,

同“大伯母ヴィルヘルミーネ”と簡稱),

◇ドロテー・マリー・エリーザベト・ヘンリエッテ

Dorothee Marie Elisabeth Henriette (*1790.1.16.Stendal- †1857.10.3.Stendal)⁷⁶

◇ヨハン・ゲオルク・ヴィルヘルム

Johann Georg Wilhelm (*1801.3.29.Stendal- †1849.11.21.Stendal)⁷⁷

この他に、

◇ヨハネ・カタリーネ・フリーデリケ・エリーザベト・ゲオルギネ Johanne Katharine

Friederike Elisabeth Georgine (*1788.2.Stendal- †1863. 3. 14. Stendal)⁷⁸

一マチ熱Rheumatisches Fieber”とのことで、4日後の2月26日に墓域號第889番に埋葬された。尚、墓域號第890番は筆者簡査の同教區民簿謄本DKB- 1874.迄の状態では未使用である。或はその妻“祖母ヘレーネ”のために用意されていたのであろうか。

⁶⁹ DKB- Stendal, Dom- 1836, Gestorbene, S. 14, Nro. 14.に“89歳3箇月”とあることから逆算。

⁷⁰ 同上。

⁷¹ DKB- Stendal, Dom- 1822, Aufgebote, S. 12, Nro. 12の“祖父ヨハン”母親欄には“Dor. Marie Margrethe Franz.”とある。

⁷² DKB- Stendal, Dom- 1852, Gestorbene, S. 20, No. 45.

⁷³ DKB- Stendal, Dom- 1857, Gestorbene, S. 30, No. 49.

⁷⁴ DKB- Stendal, Dom- 1809, Proclamations und Heirathsurkunden, S. 19- 22, [Nro.]12.

⁷⁵ DKB- Stendal, Dom- 1857, Gestorbene, S. 30, No. 49.

⁷⁶ DKB- Stendal, Dom- 1857, Gestorbene, S. 31, No. 55.

⁷⁷ DKB- Stendal, Dom- 1849, Gestorbene, S. 22, No. 66.

⁷⁸ DKB- Stendal, Dom- 1836, Gestorbene, S. 22, No. 18. その夫はデンマーク王國在クレムペ稅務官Königl. Dänischen Zoll-Controleurs; Crempe bei Glückstadtの故ヴルガーWÜRGER(*?- †?)で、彼女は“祖父ヨハン”の第1子ヨハネ・マリー・ルイーゼ(*1823.5.15.)の洗禮時(1823.5.22.)に、“3. Fr. Steuer Controll. Würger zu Krempe”の如く、その代父母10名中の一人となっており(DKB- Stendal, Dom- 1823, Geborne und Getaufte, 頁號缺, Nro. 19.), 書籍商第2代ヨハン・ゲオルク・ヴィルヘルムJohann Georg Wilhelmの娘フリーデリケ・ユリアーネ・アントーニエFriederike

も姉であったのではないかと想われる(本稿71- 2頁・附圖«E.グロッセ家系略圖»中では“姉”と假定して表示)。

このうち、長兄ゲオルク・フリードリッヒ・ヴィルヘルム(*1784.Stendal)の母親名は筆者所見の資料中に現れず、ヨハネ・カタリーネ・フリーデリケ・エリーザベト・ゲオルギネに就ては父母名共に不明乍ら、長姉ヴィルヘルミーネ(*1786.Stendal)の母親はドロテー・マリー・マルガレーテ; 舊姓フランツェンDorothee Marie Margarete, geb. FRANTZEN⁷⁹(*?- †?)であり、直ぐ上の姉ヘンリエット(*1790.1.16.Stendal)の母親はドロテー・マリー・アウグステ; 舊姓フランツェンDorothee Marie Auguste, geb. FRANTZEN⁸⁰(*?- †?), そして弟ヨハン・ゲオルク・ヴィルヘルム(*1801.3.29.Stendal)の母親はアマリエ・ユリアーネ・ドロテー; 舊姓シュレックAmalie Juliane Dorothee, geb. SCHRECK (*1771.12.Stendal- †1847.1.11.Stendal)⁸¹である。

“祖父ヨハン”の母親名が長姉エルネスティーネと同一であることからすると、教區民簿謄本の諸記載中に基本的混亂がないとするならば、直ぐ上の姉ヘンリエットの母親も同一であった筈である。このフランツェンを姓として“曾祖父ヨハン”の妻となった女性は、恐らくドロテー・マリー・マルガレーテ乃至ドロテー・マリー・マルガレーテ・アウグステをその名としていたと考えておくのが、この際最も自然であろう。弟ヨハン・ゲオルク・ヴィルヘルムの母アマリエ・ユリアーネ・ドロテーが“曾祖父ヨハン”の後添えとなったのは、“祖父ヨハン”の誕生から5乃至6歳迄の間のことである。

年長の兄ゲオルク・フリードリッヒ・ヴィルヘルム、即ち“大伯父ゲオルク”は、ハレ大學で神學博士號を取得し⁸²、ヘンリエット=エーヴァルトHenriette EWALD(*?- †?)と結婚している。ステンダール市立中等學校教頭となり、その後ステンダール市ドーム教會牧師をも兼務し、1827年以降はマクデブルク縣東南部のショーラウSchorau⁸³で牧師Pastorを務めた⁸⁴。彼の譯・著書のうち、筆者所見のものは、如下の1書のみ乍ら、

*“Platons Phädon, mit kritischen und erklärenden Anmerkungen”(von Dr. Georg Friedrich

Juliane Antonie(*1833.12.10.Stendal)の洗禮時(1834.1.31.)にも、その代父母7名中の一人となっている(DKB- Stendal, Dom- 1833, Geborne und Getaufte, S. 6, Nro 50.) 因に、クレムペC/Krempeは、エルベ河口の東岸に位置するグリックシュタットGlückstadtの東北郊に在る 確言は出来ぬものの、後述の如く書籍商第1代ヨハン・クリスティアン、即ち“曾祖父ヨハン”の遺族“妻と成人した子供達6名”という記事、及び彼女の生年などを併考しつつ教區民簿謄本を翻査したところでは、當面は彼女が“祖父ヨハン”の姉のうちの一人であった可能性が最も高い。

⁷⁹ DKB- Stendal, Dom- 1809, Proclamations und Heirathsurkunden, S. 18, [Nro.] 12.

⁸⁰ DKB- Stendal, Dom- 1857, Gestorbene, S. 31, No. 55 “Dorothee Marie Elisabeth Henricette”. DKB- Stendal, Dom- 1849, Gestorbene, S. 22, No 66.

⁸¹ DKB- Stendal, Dom- 1847, Gestorbene, S. 17, No. 3. 死亡年齢は76歳29日、遺族は成人した息子1名。

⁸² 在マクデブルク市の[新教プロヴィンツ]ザクセン教區宗務局Konsistorium der Kirchenprovinz Sachsen所藏牧師録Pfarrerbuch.

⁸³ ショーラウSchorauは州都マクデブルク市から東南方デッサウ市Dessauに向って約30km.に位置す。

⁸⁴ 彼に就てもG.F.W.Grosse個人檔が在マクデブルク市の[新教プロヴィンツ]ザクセン教區宗務局に遺っている筈であるが、筆者未調査

Wilhelm Grosse, evangelischem Pfarrer von Schorau, Moritz und Töppel, Halle, 1828, Im Hendelschen Verlage)⁸⁵

Heinsius 1822.(VI, Sp. 312.)やGV(1982.)などの書目類を簡査したところ、

*“Vollständiges und erklärendes Wörterbuch zu Eutrop’s Abrisse der römischen Geschichte”
2te umgearbeitete Auflage, 1819, Franzen und Grosse, Stendal.

をはじめとする10餘種の本名が検出された。その多くは當時の中等學校において使用したラテン語・ギリシャ語教材、及びその教師用参考書・工具書の類であり、その中には父“曾祖父ヨハン”の“フランツェン ウント グロッセ”から出版したものも含まれている。

この“大伯父ゲオルク”の妻の生家エーヴァルト家も、教會や裁判所と関係が深い。例えば、[在ステンダール市] 舊聖カタリネン修道院コンヴェントゥアル會士Konventualin des früh. St. Katharinen-Klosters Demoiseleたりしフリーデリケ=エーヴァルト Friederike EWALD (*1778.8.18. Kalbe a[n].d[er]M[ilde].- †1843.1.9.Stendal)死亡時の記録には、その遺族として、如下兄弟姉妹die Geschwister 4名の名前とその肩書を記している⁸⁶。

- ◇L[and]. [und] St[adt]. Ger[icht]. Rat Ewald zu Eisleben,
- ◇Frau Prediger Hildebrand zu Mieste,
- ◇Frau Pred[iger]. Grosse zu S[c]horau,
- ◇Frau Synode Ewald zu Marienwerder,

これに據ると、在アイスレーベンのエーヴァルトは裁判所判事をしており、在マリエンヴェーデルのエーヴァルト夫人の夫君も教區總會議員Synodeである⁸⁷。此處に謂う在ミーステの牧師Predigerヒルデブランド夫人とは、カロリーネ・ヘンリエッテ；舊姓エーヴァルト Caroline Henriette, geb. EWALD (*1783.3.22.Bismark- †1858.8.27.Stendal)⁸⁸のことを指しており、在ショーラウの牧師Predigerグロッセ夫人が“大伯父ゲオルク”の妻ヘンリエッテであること、言う迄もあるまい。

扱、“祖父ヨハン”の長姉ヴィルヘルミーネ・マリー・ドロテー・エルネスティーネ(*1786.- †1857.)は、ステンダール市立中等學校々長Direktor des Gymnasiums, Stendalクリストフ・フリードリッヒ・フェルディナンド=ハーケ博士Dr. Christoph Friedrich Ferdinand HAACKE(*1781.,∞ 1809.8.18. Stendal⁸⁹, †1857.9.16.⁹⁰)と結婚して、醫學博士フリードリッヒ・ヘルマン(*1824.1.11.,

⁸⁵ ハイデルベルク大學圖書館所藏.

⁸⁶ DKB- Stendal, Dom- 1843, Gestorbene, 頁號缺, Nro. 2.

⁸⁷ アイスレーベンLutherstadt Eislebenはマクデブルク市南方約70km., ハレ市Halle西方約30km.に在り, ミーステMiesteはステンダール市から西南西方ブラウンシュヴァイク市Braunschweigに向って約45km.に位置し, マリエンヴェーデル市Marienwerder(現ポーランド共和國Kwidzyn)はダンツィッヒ市Danzig(同Gdańsk)南方約80km.に在る. 尙, 本稿では, オーデル河以東の現ポーランド共和國における現在の地名とその舊名との對照には, Room 1980.を使用した.

⁸⁸ DKB- Stendal, Dom- 1858, Gestorbene, S.27, No. 37.

⁸⁹ DKB- Stendal, Dom- 1809, Proclamations und Heirathsurkunden, S.19- 22, [Nro.]12.

⁹⁰ 同夫人の死亡記録(DKB- Stendal, Dom- 1857, Gestorbene, S.30, No.49.)に, 遺族は“成人した子供達4名”とあるの

∞1855.5.31.⁹¹, †?)など4名の子供達を遺している(本稿67- 8頁, 及び同71- 2頁・附圖「E.グロッセ家系略圖」参照)。 又, 恐らくは次姉に當るヨハネ・カタリーネ・フリーデリケ・エリーザベト・ゲオルギネに就ては既述(55- 6頁)の如くであり, 三姉ドロテー・マリー・エリーザベト・ヘンリエッテは結婚せずに67歳の生涯をその生地ですえ, 遺族は兄弟姉妹及びその子供達であった⁹²。

家業の書籍商“フランツェン ウント グロッセ”を継いだのは弟ヨハン・ゲオルク・ヴィルヘルム(本稿では必要に応じて“第2代書籍商ヨハン”乃至は“大叔父ヨハン”と簡稱)で, 彼はシャルロット・ルイーゼ・ゾフィー・エルネスティーネ・オティーリエ=クリューガーCharlotte Louise Sophie Ernestine Ottilie KRÜGER(*1809.12.5.Stendal- †?)⁹³と1830年9月24日に結婚し⁹⁴,

◇ヨハネ・アマーリエ・ルイーゼ・オティーリエ

Johanne Amalie Louise Ottilie (*1831.6.28.Stendal⁹⁵, ∞1860.5.19.⁹⁶),

◇フリーデリケ・ユリアーネ・アントーニエ

Friederike Juliane Antonie (*1833.12.10.Stendal⁹⁷, C.1849.4.1.Stendal⁹⁸),

◇ゲオルゲ・オットー・ハインリッヒ・ヴェルナー⁹⁹

George Otto Heinrich Werner(*1837.3.2.Stendal¹⁰⁰, C.1852.4.4.Stendal¹⁰¹),

◇ヴィルヘルミーネ・オティーリエ・エリーザベト Wilhelmine Ottilie Elisabeth

(*1842.10.12.Stendal¹⁰², C.1858.3.28.Stendal¹⁰³, ∞1866.9.20.¹⁰⁴),

◇ゲオルク・フリードリッヒ・カール Georg Friedrich Karl

(*1844.6.8.Stendal¹⁰⁵, C.1860.4.1.Stendal¹⁰⁶, ∞1871.8.Stendal¹⁰⁷),

で, ハーケ博士本人の死亡はそれ以前と推定した。

⁹¹ DKB- Stendal, Dom- 1855, Aufgebotene, S 3, No 8

⁹² DKB- Stendal, Dom- 1857, Gestorbene, S. 31, No. 55.

⁹³ DKB- Stendal, St. Jacobi- 1809, S. 91- 2, [Nro.] 102.

⁹⁴ DKB- Stendal, Dom- 1830, Aufgebotene, S. 21- 2, Nro. 23.

⁹⁵ DKB- Stendal, Dom- 1831, Geborne und Getaufte, S. 3, Nr. 22.

⁹⁶ DKB- Stendal, Dom- 1860, Aufgebotene, S. 16, Nr. 12.

⁹⁷ DKB- Stendal, Dom- 1833, Geborne und Getaufte, S. 6, Nro. 50.

⁹⁸ DKB- Stendal, Dom- 1849, Confirmirten, S. 29, Zahl. 31.

⁹⁹ “第3代書籍商ゲオルク”の長女ゼルマ洗禮時(1872)の代父母第6位に“Herr. Werner Grosse in Berlin”という記載がある(DKB- Stendal, Dom- 1872, Geborne und Getaufte, S. 17, Nr. 124.). このヴェルナーは彼であろう。

¹⁰⁰ DKB- Stendal, Dom- 1837, Geborne und Getaufte, S. 2, Nro. 14.

¹⁰¹ DKB- Stendal, Dom- 1852, Confirmirten, S. 25, Zahl. 2.

¹⁰² DKB- Stendal, Dom- 1842, Geborne und Getaufte, 頁號缺, Nro. 46.

¹⁰³ DKB- Stendal, Dom- 1858, Confirmirten, S. 33, Zahl. 3.

¹⁰⁴ DKB- Stendal, Dom- 1866, Aufgebotene, S. 3, Nr. 13

¹⁰⁵ DKB- Stendal, Dom- 1844, Geborne und Getaufte, 頁號缺, Nro. 31.

¹⁰⁶ DKB- Stendal, Dom- 1860, Confirmirten, S. 30, Zahl. 10.

¹⁰⁷ DKB- Stendal, Dom- 1871, Aufgebotene, S. 7- 8, Nr. 19.

◇マリー・ルイーゼ・アントーニエ・アグネス

Marie Louise Antonie Agnes (*1849.1.20.Stendal¹⁰⁸, C.1864.3.20.Stendal¹⁰⁹)

などの2男4女をもうけた。因に、その妻シャルロッテ・ルイーゼ・ゾフィー・エルネスティーネ・オティーリエは、兄ヨハン・フリードリッヒ・カール、即ち“祖父ヨハン”の妻の妹であると考えておくのが今のところ最も自然である(後述61-2頁参照)。

この“第2代書籍商ヨハン”は1849年11月に48歳餘の若さで逝世した¹¹⁰が、その家業はゲオルク・フリードリッヒ・カール(本稿では必要に応じて“第3代書籍商ゲオルク”と簡稱)が継ぎ、彼は1871年に、ツヴィッカウZwickau¹¹¹在住のヴィルヘルミーネ・ゼルマ; 舊姓バウエルマイスター Wilhelmine Selma, geb. BAUERMEISTER(*1849.11.17.,∞1871.8.,†?)¹¹²と結婚して、如下の諸子をもうけた。

◇ゼルマ・オティーリエ・ヴィルヘルミーネ・イーダ・マルガレーテ

Selma Ottilie Wilhelmine Ida Margarethe(*1872.11.15.Stendal¹¹³-†?),

◇ハンス・ゲオルク Hans Georg (*1874.1.21.Stendal¹¹⁴, †1874.6.11.Stendal¹¹⁵)

◇ルドルフ Rudolf(*1879.1.12.Stendal¹¹⁶-†?)

このうちのハンス・ゲオルクは生後5箇月餘で他界したものの、ルドルフは、ステンダール市立中等學校を卒業後、首ずE.グロッセ在任のフライブルク大學(在籍期間: 1898年夏學期- 1899年夏學期)においてフックスFUCHS, フォン・シュルツェ・ゲーヴァニッツ v. SCHULZE-GÄVERNITZ, ズィーヴェキングSIEVEKING, ノイマンNEUMANN, リッケルトRICKERT, ドーヴェDOVE, ミヒャエルMICHAEL, ヴァイセンフェルスWEISSENFELSの諸教授から國民經濟學・地理學・哲學・歴史學・文學史を學び、その後ハイデルベルク大學に轉じてヴェーバーWEBER¹¹⁷, ラートゲンRATHGEN, キンダーマンKINDERMANN, ヘットナーHETTNER等の許で國民經濟學・地理學などを専攻すると共に、隣接學科としての法律學を[バーデン侯國?]宮廷顧問シュレーダー教授Geheimer Rat SCHROEDER, 及びイエリネックJELLINEK, ヒスHISSの兩教授にも學び、論文“17, 18世紀プファルツ選帝侯國における郵便事業Das Postwesen in der Kurpfalz im 17. und 18. Jahrhundert”を以て哲學博士號を取得している¹¹⁸。

¹⁰⁸ DKB- Stendal, Dom- 1849, Geborne und Getaufte, S. 7, No. 6.

¹⁰⁹ DKB- Stendal, Dom- 1864, Confirmirten, S. 30, Zahl. 1.

¹¹⁰ DKB- Stendal, Dom- 1849, Gestorbene, S. 22, No. 66.

¹¹¹ ツヴィッカウZwickauはライプツィヒ市Leipzig南方約65km.に位置す。

¹¹² DKB- Stendal, Dom- 1871, Aufgebote, S. 7- 8, Nr. 19.

¹¹³ DKB- Stendal, Dom- 1871, Geboren und Getaufte, S. 17, Nr. 124.

¹¹⁴ DKB- Stendal, Dom- 1874, Geboren und Getaufte, S. 4- 5, Nr. 10.

¹¹⁵ DKB- Stendal, Dom- 1874, Gestorbene, S. 84- 5, Nr. 58.

¹¹⁶ Grosse(R.) 1902., ‘Lebenslauf’.

¹¹⁷ 同上。又、マックス=ヴェーバーのハイデルベルク大學における講義題目に就ては安藤1972., 144- 5頁に詳し。これに據れば、ルドルフ受講課目は、1899年冬學期36名受講の“農業政策”であろう。

¹¹⁸ その後のルドルフの様子に就ては不詳乍ら、遇見したヨハネス=イルムシャーJohannes IRMSCHERの電腦ホ

話を再び“祖父ヨハン”に戻そう。彼はまず在ステンダール市の教区学校Schola Parochiaに通い、9歳の時から9年間(1803.- 1812.)は同市々立中等学校Gymnasiumで學んだ¹¹⁹。當時のプロイセン王國は、ナポレオンの勢力に壓迫されてエルベ河以東にその勢力を縮小しており、その結果、ステンダール、マクデブルク、ハレなどを含むエルベ河西岸の地は、ザクセン王國Kgr. Sachsenやバイエルン王國Kgr. Baiern等と共にライン聯邦Rheinbundを形成するヴェストファーレン王國Kgr. Westfalenの東縁の地として組み込まれていた(1806.- 1813.)。そのような情勢下の1812年から、兄ゲオルク(即ち“大伯父ゲオルク”)も通ったハレ大學においてクナップ[Georg Christian] KNAPP(*1753.- †1825.)、ニーマイヤー[August Hermann] NIEMEIER(*1754.- †1828.)等について神學を學び始めたものの、1813年復活祭歸省中からマクデブルク市附近一帯が大混亂に陥った結果、ハレには歸校出来なくなり、彼が再びハレに歸校して勉學を再開したのは1816年のことであった¹²⁰。

1821年には、自らが卒業し、長兄が教頭を務め、長姉ヴィルヘルミーネの夫ハーケがその校長をしているステンダール市立中等学校の教師になるとともに、翌1822年の8(?)月7日には牧師資格をも取得してord[iniert].同市ドーム教會の協力牧師Hilfspred[iger]. Stendal/Domを兼務し始め¹²¹、同月23日に同市聖ヤコビ教會St. Jacobi牧師ヨハン・フリードリッヒ[ハインリッヒ? / ハインリッヒ]¹²²=クリューガーJohann Friedrich[Heinrich? / Friedrich Heinrich] KRÜGER(*?- †?)の娘、即ち“祖母ヘレーネ”と結婚した¹²³。

1836年以降は、既述(49- 50頁)の如く、マクデブルク市西方約30km.のベルスドルフ及びヴェーフェンスレーベン(孰れも在任期間: 1836- 1850)の兩教區を受け持ち、1850年からはコッホシュテット市¹²⁴の聖ステファニー教會の教區牧師となり、その地で亡くなっている。

“祖母ヘレーネ”(*1799.Stendal¹²⁵,∞1822.8.23.Stendal¹²⁶, †?)は、ステンダール市聖ヤコビ教會牧師を務める父と母ヨハネ・ルイーゼ・ゾフィー・マリー(舊姓フォン・ルントシュテット) Johanne

ームページ“Die Gründung der Winckelmann-Gesellschaft”(http://pomoerium.com/pomoer/pomoer2/irmscher2.htm)中に“[前略] der pensionierte Regierungsdirektor Rudolf Grosse. Grosse gehörte einer alten Stendaler Familie an [後略]”という記事を見出した。これに據れば、彼ルドルフは某縣[マクデブルク縣か否か不詳]の要職を務めた後に退官した模様である

¹¹⁹ 在マクデブルク市の[新教プロヴィンツ]ザクセン教區宗務局所藏 J.F.C.グロッセ個人檔中の1818年1月21日附自筆履歷書。

¹²⁰ 同上, 1817年12月9日附文書。

¹²¹ 在マクデブルク市[新教プロヴィンツ]ザクセン教區宗務局所藏牧師錄Pfarrerbuch。

¹²² 後述61- 2, 67- 8頁參照。

¹²³ DKB- Stendal, Dom- 1822, Aufgebote, 頁號缺, Nro. 12.

¹²⁴ コッホシュテット市に就ては, Keiser1939/41., 450- 1頁を參照。

¹²⁵ DKB- Stendal, Dom- 1822, Aufgebote, 頁號缺, Nro. 12.

¹²⁶ 同上。

Louise Sophie Marie , geb. von RUNDSTEDT¹²⁷ (*1773.- †1851.)¹²⁸の子供として1799年にスタンダール市で生れた。彼女の父名の一部に就ては聊か鮮りせぬところがあるので、首ずそれに就て検討しておこう。“祖母ヘレーネ”の父母名を併記した資料のうちで筆者所見のものは、彼女と“祖父ヨハン”との結婚を記録した1822年ドーム教會教區民簿謄本のみであり、其處には、

①¹²⁹ [父] Herr Joh[ann]. Fried[rich]. Krüger / Pastor an St. Jacobi.

[母] Johanne Louise Sophie / Marie v[on]. Rundstedt.

の如く“Fried[rich].”と記されている。他方，“祖父ヨハン”の弟妻シャルロツテ・ルイーゼ・ゾフィー・エルネスティーネ・オティーリエ(舊姓クリューガー;本稿では必要に応じて“大叔母シャルロツテ”と簡稱)の母親もヨハネ・ルイーゼ・ゾフィー・マリー(舊姓フォン・ルントシュテット)で、同じ聖ヤコービ教會の牧師クリューガーをその父としていた。“大叔母シャルロツテ”の父母名を併記した資料は少くとも下記の2例があって、其處での父名は、孰れも下記の如く“Heinrich”となっており、

②¹³⁰ [父] Johann Heinrich Krüger,

Archidiaconus und Prediger bey der hiesigen St. Jakobs Kirche,

[母] Johanne Sophie Louise Marie von Rundstedt; seiner Ehefrau

③¹³¹ [父] H[err] Joh[ann]. Heinr[ich]. Krüger / Pastor an St. Jacobi.

[母] Fr[au]. Johanne Sophie / Louise Marie / v[on]. Rundstedt.

1851年7月30日午前6時半に78歳で亡くなったヨハネ・ルイーゼ・マリー=クリューガー(舊姓フォン・ルントシュテット, *1773.6.26.- †1851.7.30.Stendal)¹³²の死亡・埋葬記録においても、

④¹³³ Johanne Louise Sophie Marie Krüger, geborne von Rundstedt,

Wittwe des Predigers Johann Heinrich Krüger - - -

その夫君名は、如上“Heinrich”となっている。聊か厄介なことに、資料例②の出生届を受け付けたのが牧師カール・ルードヴィッヒ=クリューガー Carl Ludwig Krüger, Pfarrer bei St. Jacobiである如く¹³⁴、その当時の聖ヤコービ教會にはクリューガー姓の牧師が複数名いたことは確か乍ら、今のところは“祖母ヘレーネ”及び“大叔母シャルロツテ”の母名が同一である点を重視し、本稿では、シャルロツテ・ルイーゼ・ゾフィー・エルネスティーネ・オティーリエ(舊姓クリューガ

¹²⁷ “RUNDSTEDT (Herren von): Rundstedt / Helmstedt.”(Krockow 1974., S. 81.)

¹²⁸ DKB- Stendal, Dom- 1851, Gestorbene, S. 19, No. 25.

¹²⁹ DKB- Stendal, Dom- 1822, Aufgebote, 頁號缺, Nro. 12.

¹³⁰ DKB- Stendal, St. Jacobi- 1809, S. 91- 2, No. 102.

¹³¹ DKB- Stendal, Dom- 1830, Aufgebote, S. 21- 2, Nro. 23.

¹³² DKB- Stendal, Dom- 1851, Gestorbene, S. 19, No. 25.

¹³³ 同上.

¹³⁴ DKB- Stendal, St. Jacobi- 1809, S. 91- 2, No. 102. 尙、この“フリードリッヒ”=クリューガー牧師は、ドーム教會教區民簿謄本においてもその1809年8月21日生れのヨハネ・ヘンリエッテ=ベルグナー Johanne Henriette BERGNER洗禮時の代父母第1位として “Pastor Jacobi, Johan Carl Ludwig Friedrich Krüger ”の如く現れる(DKB- Stendal, Dom- 1809, S. 13, [Nro.] 23.).

一), 即ち“大叔母シャルロッセ”は, “祖母ヘレーネ”の妹と假定し, 彼女らの父親は同一人物で, その名は“Johann Heinrich”乃至“Johann Heinrich Friedrich”の孰れかであったものと想定しておく。

このクリューガー姉妹の母親ヨハネ・ルイーゼ・マリーは, 既述の如く1851年7月30日に“78歳1箇月と4日”という高齢を以て亡くなっており(因に, その生年月日を逆算すれば1773年6月26日)¹³⁵, その遺族は“成人した子供達3名”¹³⁶と記されている。しかし, 筆者が簡査し得た1809年以降の在ステンダール市諸教會の教區民簿謄本中において, このヨハネ・ルイーゼ・マリーの子供と確認し得た者は, “祖母ヘレーネ”(*1799.)と“大叔母シャルロッセ”(*1809.)のみであった。もうひとりの子供として, 今のところ唯一該当するかと想われる人物は, ゴットロープ・ハインリッヒ・アウグスト・カール=クリューガー Gottlob Heinrich August KRÜGER(*1796.5.31.-†1859.7.28.Berlin)¹³⁷のみであり, 筆者簡査の限りで云うと, 当時の在ステンダール市諸教會の教區民簿謄本に記された女性達の多くが20歳代前半で結婚していて, “祖母ヘレーネ”(*1799.)の出生はその母ヨハネ・ルイーゼ・マリー25乃至26歳時に當るから, 確證はないものの, “祖母ヘレーネ”に3歳程年長の兄がいたとしても決して不思議ではない¹³⁸。

このゴットロープ・ハインリッヒ・アウグスト・カール=クリューガーは “Land u[nd]. Stadtgerichts Assessor, Weberstraße no. 345.”(1831.11.28.¹³⁹), “K[reis]. Land- und Stadt-Gerichts Rath.”(1841.2.26.¹⁴⁰), “hies. Land- und Stadtgerichts Raths.”(1848.3.31.¹⁴¹), “Gerichtsrath”(1850.3.24.¹⁴²), “Kreisgerichtsrath”(1855.5.31.¹⁴³), “Gerichtsrath hier”(1857.4.5.¹⁴⁴), “Kreis-GerichtsRath und Major a[ußer]. D[ienst].”(1859.7.28.¹⁴⁵), “Königl. Kreis Gerichtsrath - - -, todt”¹⁴⁶の如く, 恐らくは退役後にステンダール市において司法職を務めた人物で, その1859年死亡時の遺族は“妻と娘4人”¹⁴⁷であった。因に, その妻とはエミーリエ・シャルロッセ(舊姓ヒューブナー)Emilie Charlotte, geb.

¹³⁵ DKB- Stendal, Dom- 1851, Gestorbene, S. 19, No. 25.

¹³⁶ 同上.

¹³⁷ DKB- Stendal, Dom- 1859, Gestorbene, S. 28, No. 31.

¹³⁸ 因に, 彼の次女マリー洗禮時(1831.12.30.在自宅)の主事者は同教區監督 H[err]. Superin[tendent]. ヴェーバー Weberで, その代父母全12名(含缺席者3名)中の第2位は“Frau Buch-händler Grosse geb. Krüger”, 即ち“第2代書籍商ヨハン”の妻たる“大叔母シャルロッセ”であり, 第4位は “Herr Prediger Grosse”となっている。當表記に據れば, この牧師グロッセとは, 1827年以降在ショーラウの“大伯父ゲオルク”ではなく, 當時まだ在ステンダールたりし“祖父ヨハン”を指すと理解するのが自然であろう。

¹³⁹ DKB- Stendal, Dom- 1831, Geborne, S. 5, Nro. 40.

¹⁴⁰ DKB- Stendal, Dom- 1841, Geborne, 頁號缺, Nro. 10.

¹⁴¹ DKB- Stendal, Dom- 1848, Aufgebote, S. 1, No. 4.

¹⁴² DKB- Stendal, Dom- 1848, Confirmirten, S. 29, Zahl. 35.

¹⁴³ DKB- Stendal, Dom- 1855, Aufgebote, S. 3, No. 8.

¹⁴⁴ DKB- Stendal, Dom- 1857, Confirmirten, 頁號缺, Zahl. 1.

¹⁴⁵ DKB- Stendal, Dom- 1859, Gestorbene, S. 28, No. 31.

¹⁴⁶ DKB- Stendal, Dom- 1859, Aufgebote, S. 4, Nr. 13.

¹⁴⁷ DKB- Stendal, Dom- 1859, Gestorbene, S. 28, No. 31

HÜBNER¹⁴⁸のことであり、その娘4人とは如下の諸嬢のことを指す。

◇アグネス・ドロテー・ルイーゼ

Agnes Dorothee Louise (*1829.4.4.,∞1848.5.31.Stendal)¹⁴⁹

◇マリー・ヨハネ・オティリーエ

Marie Johanne Ottilie (*1831.11.28.Stendal¹⁵⁰, C.1848.4.16.Stendal¹⁵¹)

◇エミーリエ・アントーニエ・シャルロッテ Emilie Antonie Charlotte

(*1834.2.19.Stendal¹⁵², C.1850.3.24.Stendal¹⁵³,∞1855.5.31.Stendal¹⁵⁴)

◇ルイーゼ・ヘルミーネ・ラウラ Louise Hermine Laura

(*1841.2.26.Stendal¹⁵⁵, C.1857.4.5.Stendal¹⁵⁶,∞1864.9.18.¹⁵⁷)

このうちの長女アグネスはラーテナウRathenow生れの大審院陪席判事ユリウス・フィリップ・フェルディナンド=フォン・クノーブラウフJulius Philipp Ferdinand von KNOBLAUCH¹⁵⁸, KammergerichtsAssessor (*1811.1.31.Rathenow,∞1848.5.31.)¹⁵⁹ と1848年に結婚し、三女エミーリエは、ステンダール市立中等学校々長ハーケと“大伯母ヴィルヘルミーネ”の間の息子たる醫學博士フリードリッヒ・ヘルマン(*1824.1.11.,∞1855.5.31.)¹⁶⁰ と1855年に結婚し、末娘ルイーゼはラーテナウの商人Kaufmann (Rathenow)カール・フリードリッヒ=ヒューブナーCarl Friedrich HÜBNERの息子たる在ハルバーシュタットのプロイセン王國陪席判事Königl. GerichtsAssessor (Halberstadt)ヘルマン・アウグストHermann August (*1834.8.8.,∞1864.9.18.)¹⁶¹ と1864年に結婚している。

このゴットロープ・ハインリッヒ・アウグスト・カールが“祖母ヘレーネ”の兄であったとすれば、クリューガー家出自の者たちの場合も、教會と司法機關の兩分野をその活動の場としていたということが鮮りし、そのグロッセ家・ハーケ家との縁も一再ならずということになるろう。

扱、“曾祖父ヨハン”(*1747.1.[?, 2 ?].- †1836.5.7.Stendal)¹⁶²に就ては、その死亡・埋葬記録がステ

¹⁴⁸ 例えば, DKB- Stendal, Dom- 1855, Aufgebote, S. 3, No. 8.など.

¹⁴⁹ DKB- Stendal, Dom- 1848, Aufgebote, S. 1, No. 4.

¹⁵⁰ DKB- Stendal, Dom- 1831, Geborne, S. 5, Nro. 40.

¹⁵¹ DKB- Stendal, Dom- 1848, Confirmirten, S. 27, Zahl. 24.

¹⁵² DKB- Stendal, Dom- 1834, Geborne, S. 2, Nro. 9.

¹⁵³ DKB- Stendal, Dom- 1850, Confirmirten, S. 29, Zahl. 35.

¹⁵⁴ DKB- Stendal, Dom- 1855, Aufgebote, S. 3, No. 8.

¹⁵⁵ DKB- Stendal, Dom- 1841, Geborne, 頁號缺, Nro. 10.

¹⁵⁶ DKB- Stendal, Dom- 1857, Confirmirten, 頁號缺, Zahl. 1.

¹⁵⁷ DKB- Stendal, Dom- 1864, Aufgebote, S. 4, Nr. 13.

¹⁵⁸ “KNOBLAUCH ZU HATZBACH (Herren von): Knoblauch / Rathenow.” (Krockow 1974., S. 66.)

¹⁵⁹ DKB- Stendal, Dom- 1848, Aufgebote, S. 1, No. 4.

¹⁶⁰ DKB- Stendal, Dom- 1855, Aufgebote, S. 3, No. 8.

¹⁶¹ DKB- Stendal, Dom- 1864, Aufgebote, S. 4, Nr. 13.

¹⁶² DKB- Stendal, Dom- 1836, Gestorbene, S. 14, Nro. 14.

ンダール市ドーム教會教區民簿謄本中であって、其處には、“ヴェーバー街350番地Weberstrasse no. 350”に居住せし“市民にして書籍商der Bürger und Buchhändler”，“卒中Schlagfluß”に因りて“1836年5月7日午前10時”に死亡いたし、同月11日に[同市の]墓地に埋葬され、遺族は“妻と成人した子供達6名”，なる旨の記載¹⁶³がある。此處に謂う“妻と成人した子供達6名”とは、既述(55-6頁)の如く、シュレック家出自の後添えアマリーエ・ユリアーネ・ドロテー，及び“大伯父ゲオルク”から“大叔父ヨハン”に至る“祖父ヨハン”の諸兄姉弟のことであり、このうちの末子にして書籍商を繼いだ“大叔父ヨハン”のみがシュレック家出自の後添えアマリーエ・ユリアーネ・ドロテーの子で、他の“大伯父ゲオルク”から“祖父ヨハン”に至る諸子はフランツェン家出自の先妻の子であることも、既述の如くである。

この“曾祖父ヨハン”の營んだ書籍商の屋號に關する直接資料は筆者未見乍ら、彼の先妻がフランツェン家出自の娘で、彼の末子たる“大叔父ヨハン”の死亡記事中に“フランツェン ウントグロッセの所有者Besitzer der Firma Franzen und Grosse”と記されている¹⁶⁴ことに據れば、彼自身の場合も同様に考えておいて大過なからう。既刊書目類及び電腦諸情報を簡査したところ、ステンダール市の“フランツェン ウントグロッセ”は、書籍取扱いの他に印刷出版業を兼ねており、その出版物には、少くとも、

- B1: Bücking, Johann J. “Anleitung zum Aderlassen für geübte und angehende Wundärzte”, 1781, Franzen und Grosse, Stendal.¹⁶⁵
- B2: Halil, el- “Reden al Halills des Sohns Jejischidda (/ el- Halil. Mathias Raufrost [Übers.]”, 1781, D. C. Franzen und Grosse, Stendal.¹⁶⁶
- B3: Uden, Konrad F. “Ueber die Erziehung der Töchter des Mittelstandes”, 1783, Franzen und Grosse, Stendal.¹⁶⁷
- B4: Widemann, Friedrich Bartholomaeus (preface) “Die Kunst des Buchbindens herausgegeben von D. J. J. Buecking, - - ”, 1785, Dan. Chr. Franzen & Grosse, Stendal.¹⁶⁸
- B5: Keil, Carl A. “Systematisches Verzeichniß derjenigen theologischen Schriften und Bücher, deren Kenntniß allgemein nöthig und nützlich ist”, 1792, Franzen und Grosse, Stendal¹⁶⁹.
- B6: G. Grosse “Vollstaendiges und erklärendes Woerterbuch zu Eutrop’s Abrisse der roemischen Geschichte”, 2te umgearbeitete Auflage, 1819, Franzen und Grosse, Stendal¹⁷⁰.
- B7*: Chr. Fried. Ferd. Haacke, Director des Gymnasiums zu Stendal “Abriss der griechischen

¹⁶³ DKB- Stendal, Dom- 1836, Gestorbene, S. 14, Nro. 14.

¹⁶⁴ DBA(1982 - 1985), F. I. 427, No. 105 所収 “Neuer Nekrolog der Deutschen”, Jg. 27 (1849), 1851

¹⁶⁵ BVB (<http://www-opac.bib-bvb.de/>)

¹⁶⁶ Heinsius VI, sp. 240 又, GBV (<http://193.175.100.50/>からDeutschland•Göttingen- GBVボタンを経てその検索畫面に联接).

¹⁶⁷ BVB (<http://www-opac.bib-bvb.de/>).

¹⁶⁸ British Library (<http://opac97.bl.uk/>).

¹⁶⁹ BVB (<http://www-opac.bib-bvb.de/>).

¹⁷⁰ Heinsius 1822., VI, sp. 240.

und römischen Alterthümer, nebst einer chronologischen Übersicht der griechischen und lateinischen Schriftsteller, für Gymnasien”, Dritte verbesserte und vermehrte Ausgabe, 1835, Franzen und Grosse, Stendal¹⁷¹.

B8: “Gedanken über die Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft der preußischen Cavallerie”, 1866, Franzen und Große, Stendal.¹⁷²

B9: Menzel, Clemens “Hochzeitsgebräuche in der Altmark”, 1877, Franzen und Große. Stendal.¹⁷³

などを含む単行本20餘種の他に、如下の雑誌や地圖など、併せて30餘種類が検出された。

P1: “Magazin fuer die gerichtliche Arzneykunde und medicinische Polizey”, 1.(1782/ 83)- 2. (1784), 1782(1.), 1784(2.), Franzen & Grosse, Stendal¹⁷⁴.

P2: “Neues Magazin fuer die gerichtliche Arzneykunde und medicinische Polizey”, 1. (1785)- 2. (1786/88), Franzen & Grosse, Stendal¹⁷⁵.

P3: “Beitrag zum Theater, zur Musik und der unterhaltenden Lektüre ueberhaupt”, 1.(1785), Franzen u[nd]. Grosse, Stendal¹⁷⁶.

P4: “Altmaerkisches Intelligenz- und Leseblatt” fuer das Jahr 18??, 1.(1814)- 61.(1874), Franzen u[nd]. Grosse, Stendal¹⁷⁷

P5: “Vollstaendiges Archiv der von - - bis - - durch die Amtsblaetter der Koenigl. Preuss. Regierung zu Magdeburg publicirten, die Justiz und gesammte Verwaltung betreffenden allerhoechsten Landes-, Provinzial- und Kreisverfuegungen”, 1816/36(1838) (?), Franzen und Grosse, Stendal¹⁷⁸.

M1: “Karte des Kreises S[tendal].”, ‘[1860?]’, Franzen u. Grosse, Stendal¹⁷⁹.

これら20餘種の単行本の中にはその刊年の鮮りしないものが4種類含まれているが、このうちの恐らく“第3代書籍商ゲオルク”時代の刊行と想われるB8(1866.)とB9(1877.)を除く他の単行本は、孰れも“曾祖父ヨハン”の時代に刊行されており、雑誌(P1- P5)の刊行開始も“曾祖父ヨハン”時代のことである。又、地圖はその書目記載の如く“[1860?]”年頃のことだとすると、當時“第3代書籍商ゲオルク”(C.1860.)は未成年だったので、これは恐らく、1849年12月に死亡した“第2

¹⁷¹ ハイデルベルク大學圖書館所蔵。尙、その初版は1815年か?

¹⁷² BVB (<http://www-opac.bib-bvb.de/>).

¹⁷³ 同上.

¹⁷⁴ DBI (<http://z3950gw.dbf.ddb.de/>から Deutschland-Berlin- DBI ボタンを経てその検索畫面へ联接).

¹⁷⁵ 同上.

¹⁷⁶ 同上.

¹⁷⁷ 同上.

¹⁷⁸ 同上.

¹⁷⁹ British Museum 1967., vol. 13, C. 752, ‘STENDAL’, 29970. (11.). 尙、同書當該頁に就ては在獨時にフライブルク大學圖書館で複印を作製し歸國したものの、何處かに紛れ込んでしまい、困っていたところ、前掲岩井氏が早速その複印を作製送附して下さり、事なきを得た。記して感謝の意を表したい。

代書籍商ヨハン”の未亡人“大叔母シャルロッセ”が切り盛りしていた時期の刊行物であろう。このうち筆者所見のものはB7*(1835.)¹⁸⁰のみで、その所刊者名は“Franzen und Grosse”であったが、B2(1781.)には“D. C. Franzen und Grosse”と、又、B4(1785.)には“Dan. Chr. Franzen & Grosse”と印刷されているという。確證は無いものの、例えばダニエル・クリスティアン=フランツェン或はダニエル・クリストフ=フランツェンなる書籍商がいて、彼の娘“ドロテー・マリー・アウグステ/マルガレーテ”と結婚した“曾祖父ヨハン”がその家業を継いで“Dan. Chr. Frantzen & Grosse”，或は“Franzen und Grosse”という屋號を用いたのではあるまいか。

他方、同様の方法でステンドール市のフランツェン出版物を調べてみたところ、その刊年の一應判る下記B1- B7を含む単行本10種類と雑誌1種(P1)の計11種類の出版物を検出した。

B1: “Mes minuties, ou politesse au clergé de France”, et autres, 1777, Franzen, Stendal.¹⁸¹

B2: Walther, Friedrich R. “Friderici Rudolphi Waltheri vindiciae grammaticae”, Franzen, Stendaliae.¹⁸²

B3: Bischoff, L. C. “Julie von Parma oder Noch wars Zeit”, 1779, Franzen, Stendal.¹⁸³

B4: Bischoff, L. C. “Wölheim oder die Freude in der Nacht”, 1779, Franzen, Stendal.¹⁸⁴

B5: Struve, C. F. “Geschichte des Fräulein von Holzbach und des Barons du Plebis[?], in Briefen”, Franzen, Stendal.¹⁸⁵

B6: “Allgemeine verbesserte Feuer-Ordnung”, 1784, Franzen, Stendal.¹⁸⁶

B7: Haslam, John “Beobachtungen über den Wahnsinn”, 1800, Franzen, Stendal.¹⁸⁷

P1: “Der Freund der Wahrheit und des reinen Vergnuegens”, 1779- 1779, Franzen, Stendal.¹⁸⁸

これら諸書・誌は孰れも筆者未見のため、確言は出来ぬものの、B6., B7.の兩書を除く他の諸書の刊行は前掲“フランツェン ウント グロッセ”出版物よりも古い。B6., B7.の兩書が“フランツェン ウント グロッセ”出版物と時期が重なって出版されている點は聊か氣になるものの、この邊りの事情に就ても諸種の想定が可能であって、必ずしも如上の推測を妨げるものではあるまい。“フランツェン ウント グロッセ”刊行圖書のうちで、今のところ最古のものは1781年刊行の兩書(B1., B2.)である。如上の推測に基本的な誤りがないとすれば、“曾祖父ヨハン”(*1747.)が“曾祖母ドロテー”と結婚したのは、この1781年の前後ということになる。因に、筆者簡査のステンドール市諸教會の教區民簿謄本中に現れるFRANTZEN(含FRANZEN,

¹⁸⁰ ハイデルベルク大學圖書館所蔵.

¹⁸¹ BVB (<http://www-opac.bib-bvb.de/>).

¹⁸² 同上

¹⁸³ 同上

¹⁸⁴ 同上.

¹⁸⁵ 同上.

¹⁸⁶ 同上.

¹⁸⁷ 同上.

¹⁸⁸ DBI (<http://z3950gw.dbf.ddb.de/>からDeutschland•Berlin- DBIボタンを経てその検索畫面へ联接).

FRANZ.)姓の者は、“曾祖父ヨハン”の先妻がその子供の故母として三出¹⁸⁹するのみであった。

この“曾祖父ヨハン”は、その死亡時の記録から逆算すると1747年の1乃至2月生れ乍ら、その生地及び成長の様子に就き、筆者は今のところ何も掴んでいない。判っていることは、7年戦争(1756-1763)、フランス革命(1789)、フランス勢力の伸張(例えばアルトマルクのヴェストファリア王国への編入)と後退といった混亂の時代に在って、彼が首ず“曾祖母ドロテー”との結婚を皮切りに書籍商“フランツェン ウント グロッセ”を営み、前掲の如き(その書・誌名のみからの推測乍ら)司法/行政関係諸誌(P1., 5.), 中等学校用教材・参考書・工具書類(B6., 7.), 女子教育関係書(B3.), 教會関係書籍(B5.), 醫學関係書・誌(B1., P2.), 軍隊関係書(B8.), 音樂誌(P3.)及び郷土関係書・誌(B9., P4.)などの諸書・誌を相前後して出版したということであって、先妻の子供達は、その外に向かう才能と然るべき伴侶とを得て、父親の大手得意先でもあった教育・宗教等の各界において或は活躍し或はその活動を助け、後添えの妻とその間に生れた末子は本業の書籍商を守り繼ぐという、洵に好き家族にも恵まれていたということである。

彼の後添えのアマーリエ・ユリアーネ・ドロテー(*1770.12.13.- †1847.1.11.Stendal)¹⁹⁰及びその生家シュレック家に就て筆者が知り得たことは、今のところ、1809年8月18日にステンダール市ヴェーバー街351の“曾祖父ヨハン”宅において行なわれた“大伯母ヴィルヘルミーネ”と市立中學校々長ハーケの結婚記録中に記述された事柄のみで、其處には新郎新婦とその父母、及びその證人4名の名前と肩書とが各々如下の組合せで記載¹⁹¹されている。

[新郎] Herr Christoph Friedrich Ferdinand Haacke; 28歳, 長男.

Rector der hiesigen grossen Stadtschule.

[同父] 故Herr Christian Gottlieb Haacke;

Archidiaconi zu Friedeberg in der Neumark¹⁹².

[同母] 未亡人Frau Ernestine Friederike Haacke; geb. Wiedemann.

[新婦] Jungfr Marie Dorothee Ernestine Wilhelmine Grosse; 23歳, 長女.

[同父] Herr Johann Christian Grosse; hiesigen Buchhändlers.

[同母] 故Frau Marie Dorothee Margarethe Grosse; geb. Franzen.

[證人1.]Herr Johann Jacob Schreck; Prediger bey der hiesigen Petri Kirche.

“Stiefgrossvater [von der Braut]”.

[證人2.]Herr Johann David Krüger; der viersten Adjunct bey der hiesigen Mairie.

“Stiefgrossoncle [von der Braut]”.

[證人3.]Herr Johann Friedrich Schreck; der Candidatus theologiae,

“Stiefoncle von der Braut”.

¹⁸⁹ DKB- Stendal, Dom- 1809, Aufgebote, S. 19- 22, [Nro.] 12., DKB- Stendal, Dom- 1822, Aufgebote,頁號缺, Nro. 12, DKB- Stendal, Dom- 1857, Gestorbene, S. 31, No. 55.

¹⁹⁰ DKB- Stendal, Dom- 1809, Gestorbene, S. 17, No. 3.

¹⁹¹ DKB- Stendal, Dom- 1809, Proclamations und Heirathsurkunden, S. 19- 22, [Nro.] 12.

¹⁹² ノイマルクのフリーデベルクFriedeberg in der Neumarkは、ベルリン市東北東約140km., フランクフルト市Frankfurt an der Oder北東約90km.に位置し、現ポーランド共和國のStrzelce Krajeńskie.

[証人4.]Herr Johann Heinrich Krüger; Archidiaconus an der hiesigen St. Jacobi Kirche.

“welcher mit den Contrahenten in keinem Grade verwandt ist”

此處でまず注目すべきは証人1.- 3.の個々に對する説明部分であろう。その原文は、當該3名の肩書及び名前を前掲順に記したうえで“[前略], welche resp: Stiefgrossvater, Stiefgrossoncle und Stiefoncle von der Braut, [後略]”(同DKB21頁)となっている。1809年と云えば、既に新婦の父たる“曾祖父ヨハン”が後添えアマーリエ・ユリアーネ・ドロテーと結婚して1801年に“大叔父ヨハン”を産んだ後のことであり、當該資料に據れば、ヨハン・ヤコブ=シュレック(証人1.)は花嫁の繼母の父であり、彼はステンダール市ペトリ教會牧師をその職としていた。又、同市第4助役のヨハン・ダーフィット=クリューガー(証人2.)は繼母の母親の兄乃至弟に當る筈で、神學候補生のヨハン・フリードリッヒ=シュレック(証人3.)は繼母の兄乃至弟ということになる。又、証人4.の同市聖ヤコビ教會副僧正ヨハン・ハインリッヒ=クリューガーは、ヨハン・ダーフィット=クリューガー(証人2.)と同じクリューガー姓乍ら、その附記された説明に據れば、當面は別の家系に屬すと見做しておく可きであろう。因に、この証人4.のクリューガーが“祖母ヘレーネ”(∞1822.)・“大叔母シャルロッテ”(∞1830.)の父親で、この十餘年後に當グロッセ家の姻戚となった人物である。

ところで、如下の綴りを如し同一視して好いのであれば¹⁹³、當時のステンダール市ドーム教會教區には、1818年7月23日に74歳4箇月で亡くなったマリー・ドロテー=シュレックという未婚女性もいた。樞密顧問官たりし彼女の父親は、彼女の亡くなる遙か以前に死亡していたとい

Demois. Marie Dorothee Schre[?]ck,

Tochter des längst verstorb. Hofrats Herrn Christian Friedrich Schröck, Weberstraße no. 345.¹⁹⁴

う。彼女自身はヴェーバー街345番地で亡くなっており、この地番は、前に“祖母ヘレーネ”の兄かもしれぬとしたゴットロープ・ハインリッヒ・アウグスト・カール=クリューガーが1831年に住んでいた地番と同一¹⁹⁵で、“曾祖父ヨハン”も同じヴェーバー街の住人であった。彼女の遺族は“成人した在ゼーハウゼン¹⁹⁶の兄弟一人einen majorennen Bruder in Seehausen”とのこと¹⁹⁷なので、或は單なる同姓者に過ぎぬのかもしれない、留意しておきたい。

(1999. 12. 19.初稿, 2000. 1. 8.稍改)

¹⁹³ 尙, S シェルマンに據れば當該地域に於いて“e”と“ö”とは同用可能とのこと。

¹⁹⁴ DKB- Stendal, Dom- 1818, Gestorbene, 頁號缺, Nro. 10.

¹⁹⁵ DKB- Stendal, Dom- 1831, Geborne, S. 5, Nro. 40.

¹⁹⁶ 當ゼーハウゼンSeehausenは,ステンダール市北北東約35km に位置するゼーハウゼンであろう。

¹⁹⁷ DKB- Stendal, Dom- 1818, Gestorbene, 頁號缺, Nro. 10.

[追記①・②]

① その後、引續き獨逸の電腦情報を調べていたところ、他にもGBV¹⁹⁸及びBerlin OPAC¹⁹⁹をはじめとする検索サイトが數種あることに氣づいた。簡査の結果、書籍商“フランツェン”及び同“フランツェン ウント グロッセ”出版物(含・印刷物)はその點數・内容ともに本稿所記のものより増加・充實した。書・誌名及びその出版點數などに就ては、重複を整理したうえで、次號“Ⅲ. ステンダール・マクデブルク・フライブルク”において紹介する豫定乍ら、GBV検索時に如下の書誌情報を見出したので、取り急ぎ紹介しておこう。

“Heilige Blicke auf die Herrlichkeit Gottes und auf die Wohnungen der Ruhe, welche ein rechtschaffener Christ jederzeit bey dem Gebrauch des heiligen Vater Unser im Geiste thut, zur Ermunterung in diesen trübseligen Zeiten aufgefaßt / von einem Liebhaber himmlischer Gedanken. - Stendal, gedruckt bey Daniel Christian Frantzen, 1764- 1765”

即ち、この消息に誤りないとすれば、フランツェンの名前は“ダニエル・クリスティアン”ということになり、少くともその印刷部門に就ては1764年以來ステンドールにおいて行なっていたこととなろう。(2000.1.19.追記).

② 又、1694年から1850年迄のステンドール市民に關する諸資料を整理・編纂して1938年に出版したWilly Salewski; “Die Bürgerbücher der Stadt Stendal 1694- 1850”²⁰⁰, Sonderveröffentlichungen der Ostfälischen Familienkundlichen Kommission Nr. 16, 1938, Verlag Degener & Co., Inh.: Oswald Spohr, Marktschellenberg.という書名のステンドール市民目録²⁰¹を簡査したところ、“曾祖父ヨハン”, “第2代書籍商ヨハン”, “曾祖母ドロテー”, 及びその父ダニエル・クリスティアン=フランツェン達に就て如下の記載を見出したので、關聯記述を紹介しておきたい。

Grosse

... Buchhändler × St.: 29.VII.1831

Joh. Chn. Buchhändler * Lpz. **TO** Do. Mie. Mgr. Franzen: 6.XI.1779 [以上, 同書59頁]

Franzen (Franzen)

Dan. Chn. Buchdrucker * Hbg. (W. Kfm. Hbg.): 3.I.1755

Do. Mie. Mgr. f. Grosse, Joh. Chn. [以上, 同書52頁]

Am Ende

Joh. [übernahm von Schwiegerv. Aug. Günther Bartge die 1666 von And. Güssow als erste in der Mark gegründete Druckerei] **TO** Mie. Elis. Bartge [heiratete als We. 23.I.1755 Drucker Dan. Chn.

Franzen in Ja. Franzen & Grosse, heute Trommlerverlag G.m.b.H.]: 26.VI.1708

Val. Barbier (W. Joh. — Buchbinder B. St., M. Mie. Elis. Bartge): 15.VI.1725 G.

Val. Buchdrucker Chirurgus (W. Joh. — Buchdrucker B. St.): 22.IV.1729

[以上, 同書11頁]

¹⁹⁸ <http://gso.gbv.de/>.

¹⁹⁹ <http://www.dbilink.de/>からDatenbanken-GUEST-BerlinOPACボタンを経て當該検索畫面へ聯接.

²⁰⁰ “Mit einem nachtrag über die Bürgermatrikel der Französischen und Pfälzer Kolonie bearbeitet von Dr. Ernst Görge.”

²⁰¹ ユタ系圖協會所藏マイクロフィルムを使用.

これに據れば、“曾祖父ヨハン”はライプツィヒ生れで、ステンドール市々民資格取得は1779年11月6日、その結婚相手はドロテー・マリー・マルガレーテ=フランツェン、即ち“曾祖母ドロテー”である。又、彼の名の1行上に“…”として記されたステンドール生れの書籍商は、恐らく“第2代書籍商ヨハン”のことを指し、この“29. VII. 1831”という日附は、当時30歳の“第2代書籍商ヨハン”(*1801.,∞1830.)がその第1子たる長女ヨハネ・アマリエ・ルイーゼ・オティーリエ(*1831.6.28.)誕生後約1箇月の時点で、そのステンドール市民資格を取得したことを物語るものであろう。

又、ハンブルクの商人を父に持つダニエル・クリスティアン=フランツェンは、ハンブルク生れで、そのステンドール市に來住して同市々民資格を取得したのは1755年1月3日とある。同書の記述に従えば、その生業は“書籍印刷業”，恐らくは1755年1月23日に、ヨハン=アム エンデ 未亡人マリー・エリーザベト(舊姓バルトウケ)と結婚している。又、このマリー・エリーザベトの父アウグスト・ギュンター=バルトウケは、1666年にアンドレアス=ギュッソウによって設立されたマルク地方最初²⁰²という由緒ある印刷所をその女婿ヨハン=アム エンデに引き渡したとのことである。このヨハン=アム エンデの息子にして書籍印刷と外科醫とを兼ねていたヴァーレンティーンのその後の様子に就ては聊か氣懸り乍ら、ハンブルク出身のフランツェンが首ずステンドール市の市民資格を取得したうえで印刷所經營者未亡人マリー・エリーザベトと結婚したことに因り、同印刷所の實質的運営は、次第にこのフランツェンによって擔われていったのではあるまいか。

ともあれ、當市民目錄の整理結果に間違いがないとするならば、書籍商“フランツェン ウント グロッセ”は、血縁及び資産の點は別にしても、その系譜を1666年のアンドレアス=ギュッソウ創設の印刷所にまで遡り得るということになる。勿論、當市民目錄は原資料を整理・編集したもので、筆者が簡査したものはそのマイクロフィルムに過ぎぬため、同書そのものの資料的性格に對する吟味が必要なことは充分自覺しているつもり乍ら、参考迄に提示しておく。

(2000.2.9.再記)

²⁰² 因に、“The Encyclopædia Britannica: A Dictionary of Arts, Sciences, and General Literature”第9版[1875- 1888; Adam and Charles Black, Edinburgh], XXII[1887.]. 532頁の“Stendal”という項目に、“[前略]. The earliest printing- press in the Altmark was erected here, and published an edition of the Sachsenspiegel in 1488 as its first book [後略]”とあり、これに據れば、當ステンドールにおける印刷の歴史は更に180年ほど遡るようである。



當系圖においては、原則として、グロッセ家の各世代を左から右へ第1・第4世代の如く配し、これに本姓で示した人物を除いた各家族の子弟の婚姻は、これを確認し得た場合は従って左に、兄弟姉妹の身元は右に記すものをも含む

當系圖の用字は、妻姓にDKB, NDB, 及び本文内括弧の用字にてあり、その姓を出るものは姓が容易な筈なので、此處ではその身元を明確にする。但、如下5例に於て、脚附が必須で、その姓を或る姓の姓へと変更されるので、以下に記しておく

- 第2世代のHUBNER, 3名相互の關係については特記
- 第3世代のFriederike Hennecke HAACKE (*1811, +1874/Magdeburg)の婚姻はDKB-Magdeburg, St. Johannes 1874, Gestorbene, 同職; No. 38, 因こ、その職は成人した兄弟姉妹3名
- 同上 Werner Theoph HAACKE (*1817, Stendal, +1874), Dr. med. (1839, Univ Halle)博士の關係は「GV」B.53, S.10, Med. Diss. (Univ Halle-Wittenberg)
- 同上 Friedrich Hermann HAACKE (*1824, +1885, +1888), Dr. med. (1848, 1898, Univ Halle)博士の關係は「GV」B.53, S.9, Med. Diss. (同3)
- 第5世代Erna (*1912/13, +1964)は母に於ては、R.ヘルツォーク博士の電話(1996年9月初旬)に據る。因こ、同氏は1964年、シュトゥットガルト在住のエルナさんと會っており、フライブルグ大学民族学研究所職 E.グロッセの關係の關係を交けたのもその頃、とのこと